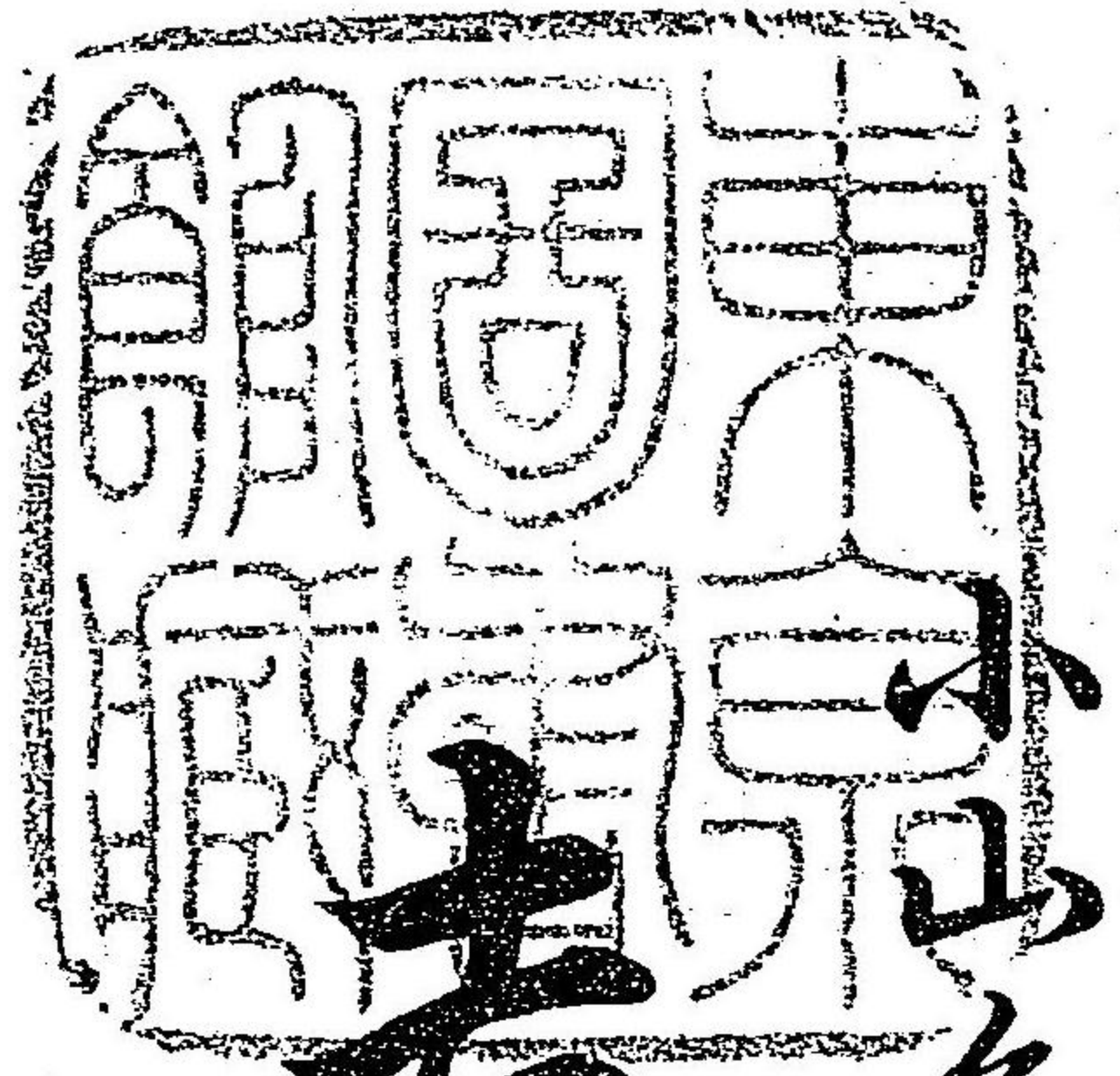
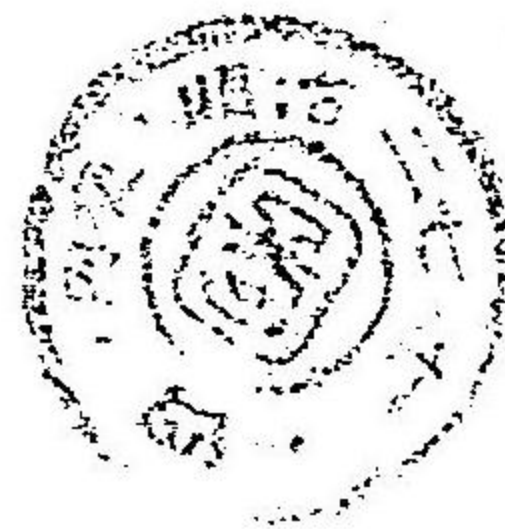


4-247



小山多乎理翁校订  
吉野拾遗



吉野假宮

吉野假宮の御代

あしまの蟹の横さまふる北風のあらひをさげ給ひて  
よき人のよしのよく見てよしこいひし吉野の假宮に  
おはしましける御代の事こもは古き文こにもものこ  
りたれさかり菰のいこみたれしいにしへの御代のこ  
とにしあればたしかにそれこもさたかからぬここの  
多かるこそうれたけれ此拾遺物語はいさゝかかれの  
いさゝけき水くきのあこかれこもまさしく吉野の假  
宮に仕へ奉られし吉房侍従の延元のはしめ彼山に潜  
幸在しより正平十三年まで廿三年の屋霜假宮にて在  
しとこもを志のふくさ志のひあまりておもひ出らる  
とまゝに事のついてをいはさあこさきにしこけかく

書こゝめられしかはやく人々の手より手に物きこて  
文字をばしめ誤こおほしき事ありけかれこくらへ考  
たゝまふ志もかきまゝに貞亨に刊行せる本群書類從  
中にある屋代ぬ志の本橋家ふる書寫の舊本又近頃得  
し古寫本かこてら志合ふみくらふれこもかたみによ  
しあしありけにていかにせんされは猶よき本を得た  
らむ折にもこおもふついで手近き一二の文こもより  
事の考のたよりあるへきくたりくを書くはへ志も  
ゆめよき人によしのよく見きへきこにはあらず時は  
明治の十九年葉月の半

七十一叟 小山多平李

新安手簡に云

世有吉野拾遺記南朝事歴々可徵寔是太史氏採拾  
然不著編者之名雖鷲峰之博洽猶憾不知其人而余  
於野山集偶得撰人之名云吉房朝臣所著吉房仕後  
醍醐帝勤恪不二登遐之後思慕不止薙染爲僧自號  
松翁取松柏歲寒不變之操之義廬於陵側後舊僚公  
連朝臣遜世號古音住大安寺者相偕參河内州經山  
古琴禪師究宗要古琴嗣法草河眞觀禪師唱雲門宗  
者也著野山集者又南朝官人而與松翁古音爲法友  
不能忘情具記傳諸後云俱失其人姓字蓋南朝舊臣  
退隱者也

屬者借潜鋒集於其弟菊坡而讀之雜著中亦恨失  
 松翁姓字考證援引以爲命鶴丸不知然乎否  
 群書一覽云寫本一卷刊本分て四本とす南朝の事  
 跡を假字にて記せり刊本乃奥書松翁とあり此松  
 翁と云は侍從忠房幼名命松丸といひし人乃よし  
 ちるして其姓氏を詳にせま<sup>云</sup>  
 ○此文てにをば語格ともいかにそやとたほ去き  
 事ともあれとも其ころはかくもありけんとおも  
 へはいまわたくしには改さるふりたこへは啓せ  
 させ給ひとあるへきを啓しさせといひ詠せさせ  
 御覽せさせを詠しさせ御覽しさせふと又たまひ

とあるへきを給ふといへるふこの如し見ん人あ  
 やしむことおかれ

多乎李再しるま

貞享本標

目

(一) 主上吉野ノ宮ニテ御歌ノ事

### 参考 吉野拾遺上

先帝の御時世の中うつりかはりもてきて、吉野の假宮にわたらせ給ひ、延元々々年かりし年も、事のさわぎの内にくれば、てと、春たつといふばかりなる御節會のさまもいとかなし。

今按拾遺春上壬生忠峯春立といふはかりにやみよしのと山もかすみてけさはみゆらむ

きさらぎの半過ゆくほどに、御庭の櫻のやうく咲いてたるを、御覽しさせ給ひて、勾當の内侍に仰られける御歌、

こゝにても雲わのさくら咲にけり

たごかりうめのやどとおもへど

新葉集春下よしのと假宮にねはしましける時雲わの櫻とて世尊寺のほとりにありける花のさかりを御覽してよませ給けること

にても云々とあり、先帝は後醍醐天皇を申奉る世の中うつりかはりて云々

神皇正統記に云元延元年五月にもなりぬ、尊氏等西國の凶徒を相かた  
らひて重て攻のほる官軍利なくして凶徒都に歸參せしほとに同  
廿七日又山門に臨幸し給ふ八月にいたるまで度々合戦ありしか  
と官軍いとすまます依て都には元弘の僞主御弟に三の御子豊仁  
と申奉りけるを位につけ奉る十月の比にや關城書武家のほ  
からひによりて主上都に出させ給ふいと淺ましかりし事なれ  
と又行末をおほしめず道ありしにこそ同十二月同十二月同十二月に  
しのひて都をいてましまして河内國に正成といひしか一族をぬ  
して吉野にいらせ給ひぬと見えたる時にてはるたつとあれば  
その明る年延元二年丁丑の春也○勾當内侍誰女なる事を未詳或  
云頭太夫行房女也と太平記を考ふるふ行房の女は建武の始新田義  
貞に賜りたる内侍なれぬ恐らくは別人なるへし

(二) 天女ノ  
歌ノ事

考職員令侍二人掌供奉常侍奏讀宣傳檢校女孺兼知内外命婦朝  
參及禁中禮式事典侍四人掌同侍唯不得奏請宣傳古實拾要ニ云  
此内一掌侍以爲勾當内侍隨補日爲一二也侍臣女任之侍臣トハ四  
位五位ノ殿上人也

れなと帝豊明の節會をせさせ給へるに、あまりにかたばかりな  
るありさまを、たほしなげかせ給ひけるに、袖振山のまぢかく見  
えたりければ、

袖かへす天津をどめもれもひいでよ

よしのくみやのむかしがたりを

と打なげかせ給ひて、本なし月ふくる迄おはしましけるに、御夢ともな  
く、袖ふる山の上よりしら雲のたなびきて、南殿の御庭の冬がれ  
し櫻の木末よとままりけるに、それかどをかりおほしやらせ給

此已下ニ  
毛給ヘト  
アルハ本  
給トノミ  
アリテ給  
ヒトモ給  
ヘトモヨ  
ムベキ所  
ナルヲ印  
本ノトキ  
ヘ文字ヲ  
添ヘタル  
ナルベシ

此問歌

へるに、をどめの姿打しほれたるが、

かへしなば雨とやふらむあはれしる

天津をどめの袖のけしきを

どなくく詠じて、雲にかくれけるを、御覽におくらせ給へて、御心ぼろげに、とたらせ給ひし御ありさま、とすられがたくころ。

豊明は昔はいへにもあれ大内の宴樂をいへる也六百番歌合顯昭か陳狀にいへるかふとし其後は豊明といへは十一月中の辰の日今年の稻を神に奉らせ給ひ君にもきこしめし臣下にも給ふとて行るゝ節會也公事根元袖振山は吉野にあり御影山とも云本朝月令五節舞者淨原天皇所製相傳云天皇吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫雲下雲氣忽起疑如高麗神女髣髴雍曲舞舞他人無見舉袖五變故謂五節云平度綿度茂色度綿左備須茂可良多萬乎多茂度爾聯岐底乎度綿佐備須茂新葉集冬部元弘三年后宮月次屏風に五節を

(三) 稻荷の  
明神隱幸  
ノ道ヲ照  
シ玉フ事  
花山院在  
京城近衛  
西京東洞  
院東一町

袖かへす云と見たりころにては吉野に潜幸ありての事とす按元弘三年は己酉の歲にして天皇隱岐國より還幸ありし年也十月に中宮後京極院崩給ひ十二月珣子内親王爲中宮と女院小傳に見えたれば此御製は珣子内親王立后の御屏風ならむもしは其昔をおもひ出たまひてかくは詠たまひしか

れなむ帝花山院をひそかに出御ならせ給ひて、大和のかたへおもむかせ給ひけるに、いとくらき夜なりければ、御供にさふらひける人、いかにせむとわびあへるをきかせ給ひて、ころはいづくのほどにやと、たづねさせ給ひければ、忠房の侍從村上源氏千種忠顯男いなりの御社の前にころと奏し給へむ御歌

むを珠のくらきやみちにまよふ也

とれにかさなむみつのともし火

とて、伏し拜ませたまひければ、御社のうへより、いとあかき雲一  
むら立出で来て、臨幸の道をしてらしおくりて、やまどの内山に波  
市石上の間、大道也、いらせ給へば、雲はかねのみたけの上にて消  
失にけり。まさしく御供に侍りて見しことらひにこそ。

接此一段順序をいはず、卷の初にあるべき條なれども、稿本校本本  
流布本にも皆こゝに載たるは、おもひいてらるゝまゝに書すさま  
なれば、次第には拘らざりしにやあらんさて、こゝは上に引たる延  
元々年十二月花山院をしのひ出させ給ひて、吉野の臨幸の御路次  
の事なり。元弘日記裏書皇年代略記十二月廿二日と見え、公卿補任  
作廿四日太平記二十八日とある。そ御路次のさまにも、打合たる同  
云今夜いかにもして吉野邊までなし参らせんとて、是より寮の御  
馬を進ませたれども、八月八月廿八日の夜八月の夜廿八日となれば、道最暗  
くして春日山の上より金峯山の嶺まで、光物飛わたる勢に見えて

松明の如くなる光終夜天をてらし、地をてらしける間行路分明に  
見えて程なく夜の曙に大和國加名生と云處に落つかせ給ひける  
此段は太平記始諸書に見えたれは、今省略す  
稻荷社は山城國紀伊郡稻荷神社三座並名神大延喜式〇まさしく  
御供に侍りてとあるは、松翁吉房の事也。又南山巡狩錄延元々年廿  
一日條に、後醍醐天皇はさきに尊氏か偽の辭をたのませ給ひ、山門  
より還幸ありしかと、尊氏もとより君をはかり参らせし事なれば、  
主上をば花山院にたしこめ参らせたり。この比は更に宸襟をやす  
め給ふ隙なし。刑部太夫和氣景繁一人は、尊氏のゆるしを得、御所に  
伺公し御薬を奉りける時、勾當内侍をもて諸國に於て官軍蜂起な  
ずよしを潜に奏聞申ければ、中此御所を忍出給むはかりとをめぐ  
らされける明夜必察の御馬を川意し、東の小門に相待へしと仰含  
られて、其刻にもなりにしかは三種神器を勾當の内侍に持せて、築  
地の崩より女房の姿にてしのひ出給ふ。中白晝に南都通らせ給は



人怪み奉らんとて張輿にめしけるかへされて供奉の上北面を輿舁  
になし三種神器をは行器にいれもの詣する人の破籠などの様に  
見せて其日のくれ程に内山につかせ給ひ今夜いかにもして吉野  
邊まで御幸なし参らせんと此所より寮の御馬に召替させ給ひけ  
るいとくらき夜也ければ下書太平記には其夜梨間宿にとまり給  
へと云りいづれも今考かたし

(四)吉水法  
印歌ノ事

おなを帝よし野へうつらせ給ひける又のとし延元三年の春むつき  
の末つかたよし水の法印に吉水法印宗信尊たまはせける御歌、  
みよしのと山のやま守とどはむ

今いくかありてはなハ咲なむ

新後拾遺春上正中百首歌めされし序に云々今考延元二年よりは十  
一年のむかし御製也

御返し

(五)勾當内  
侍歌ノ事

花さかむころはいつとも白雲の

かるをしるべにみよしのと山

おなを御時山のさくらをながめさせ給ひて勾當内侍に折ふし  
のうつりかはるにころ昔のうたに、

れしなべてこのめも春と見えしより

花になり行みよしのと山

とよみつる時は此山をまだ見ざりし。

此御製は新千載春上正中二年七月廿七日うへのをのことも題を  
さくりて百首歌よみける時初花といふことをよみ給ひけるとあ  
り

今はまたはたこくに住なれてうの折ふしの戀しくれもひ出らるく  
はいかにとの給すれば、どもに打泣給ひて、

啓トハ東宮ノ申言ハルコトヲ例シテハ  
宮ヘト申言ハルコトヲ例シテハ  
例トハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ  
例シテハ東宮ノ申言ハルコトヲ

いにしへをしのぶなみだはみよしのと

よしのと山の花のした露

と啓し給へば、いといたうあはれがらせ給ひけり、誠にかぎりな  
きなみだの、いとしくこそ見え侍りけれ、折ふし、登に侍る 厂の通りけれ  
ば、おなじ内侍に、心なく、登に侍る 厂ころかへれど、のたまはせ給ひければ、  
貞亨本に主上をかしが  
らせ給とあり、塙本脱

厂がねにしが身をなさばみよしのと

花も見すてくかへらざらまし

接かへらざらましは立かへらましを誤しにはあらずや又此卷奏  
といふへき所とに啓すとあるは刊行のとき何心なくおなじ事と  
おもひ誤りたるならん啓は春宮中宮へ申詞也天子には奏ト云こ  
そいにしへの定なれ

(六)内侍妹  
ノ方ニ返  
歌ノ事

れなと内侍に、故郷の妹の君のかたより、山のうちの御住るこそ、  
おもひやられていとかなしうこそ、とありける御文の返事に、

春ハ花秋はもみぢをみよしのと

山のかひある住居とをしれ

此内侍同上妹同上猶考べきなり

先帝の御時、さみだれのいと久しう降つゞき侍りける比、四年延元  
五月かんたちめを公卿あまた御前に侍らひ給ひて、御遊のたをし  
ましけるに、實世卿洞院公實男號の川音高きさみだれに、いをも  
と見えぬ瀧のけしきこそよなうと啓しさせ給ひければ、さも  
ころあらめ、空さへそれなばどのたまえせて、

考實世卿の秀句にとりなして奏せられしは新後拾遺川五月雨と  
いふ心をよませ給ひける御製みよしのや川音高き五月雨にい

(七)御歌ノ  
徳ニテ雨  
ハレシ車

もと見えぬたきのしら波と見ねて此集は後圓融院永和元年勅を奉して御子左中納言爲兼卿の撰にて至徳元年奏上のよしなればこの延元四年よりは四十年あまり後の集にていかにも覺束なしはらくうたかひをのこして後の考を俟つ

うの明の日、とりあへず御幸ありけるに、今夢違觀 観音堂の音と云ほどりまで、またらせ給ひけるに、空のけしきいとおどろくしうなりて、又かきくらしめて、くもりて しのをつくが如くふりいでければ、御堂に志ばらく立やすらはせ給ひて、

この里 ころは猶丹生のやしろし程近し

いのらば晴よさみだれの空新雜

新葉集よしのゝ行宮にて五月雨のはれまなかりける比雨師の社に奉幣使などたてられてねほしつゞけさせ給ひける云々集に丹生の社しとあり丹生社在下市村之西祭神一坐岡象女神天武天皇白

鳳四年鎮坐侍中群要祈雨使事藏人發向大和丹生川上雨師社云々神名帳吉野郡云々丹生川上神社名神大目

と詠しさせ給ひけれを、ときにとりて入れけるのみかは、日かけうらくかになりて、うれよりふらざりけり。帝徳のいみじうまたらせ給へるを、人々もたのもしくれもひあひけるに、おなじ八月の初の比より、秋霧にをかされさせ給ひけるか、かねて時をもしろしめしけるにや、同十五日の夜、親王を第七御子諱義良建武元年夏爲親王延元三年叙 三品爲陸左大臣經忠公近衛關白左大臣の亭ようつし奉らせた 奥守太守まひ三種の御寶を譲りはしまし、御行末の事、いとこまやかに仰れかれて、御劔と法華經とを左右の御手よものし給ひ、いざよひの月とともに、雲がくれさせ給ひけるに、つきしたがり奉りし人々は、たゞやみぢにまよふこくちなむし給ひける。

太平記廿一云延元三年四年八月九日より吉野主上御不豫の御事ありけるか次第に重らせ玉略中八月十六日丑定尅作遂に崩御なりけり云々参考本に云延元三年北元略八月十六日後醍醐帝崩天正本神皇正統記召運録常樂記元弘日記裏書神明鏡延元四年八月十六日帝崩曆代皇記保雁間記李花集興國二年崩諸實錄互相違辰難取一決今通考諸書以推其實所謂延元四年崩者爲得矣云々委見御壽五十二

御すがたをあらため奉りて、如意輪寺の御堂のうしろのかたにをさめ奉り、御おくりして、人々はかへり給ひけれども、さらに人ごうちもなかりければ、御廟の前になきあかして、しのぐめ過るほどにまちて、かしらおろし、かしてき御影のあたり近く、草の庵をむねひて、なき御跡までつかふまつりけるに、

考太平記に云兼て遺勅ありしかは御終焉の御形を改す棺襚を厚

くして御座を正しうして吉野山の麓藏王堂の良なる林の奥に圓丘を高く築て北向に葬奉る同異本云御遺勅に任せ御形を改すして山鳩色の御衣に御冠を召せ鳥羽院一本後鳥羽より御傳ありける三掬と云靈劔を玉體に添奉り藏王堂の良の林奥一本塔尾葬奉云々

うの長月の十日あまりの月、いとさやかに見ゆるに、むかしの御事などおもひ出て、

いまはくやとすればつべきいにしへを

おもひ出よとすめる月かな

といひて、すこしまどろみけるに、御廟の前に、百官袖をつらねてなみお給へるを、おぼつかなくおもひて、資朝卿日野大納言俊光廿九日於のよろづはからはせ給ひて、ればします御袖をひかへ配所被斬のよろづはからはせ給ひて、ればします御袖をひかへて、とひ奉るに、こくにては舊都に程遠くして、御本意をどげさせ

給はむ御はかりごともなりがたければ、龜山の仙洞城龜山仙洞山葛城郡  
 在後嵯峨院離宮に行幸ならせ給へるにころあれど、のたまひもあへぬ  
 に、御戸ひらのひらき給へるに見奉れば、そのきはの御姿にて、玉  
 のみこしにめされけれを、伶人樂を奏し、百官供奉し奉りけると  
 見て、打おどろきけるに、松吹風に音樂の猶きこゆる物から、いつ  
 との色の雲、御廟よりいで、北のかたへ長うたなびきてみゆる  
 に、さらになみだもどまらで、御影も今ハこくに記はしまさぬに記はしまさぬはさぬにや  
 ど、いとかなしくて過し侍りける程に、れなしき夜に舊都にいま  
 す夢窓和尚の夢に、君龜山の舊都跡に行幸ならせ給ひて、群臣とく  
 もに宴せさせ給へると見給ふて、武家に心をあそせて、御寺をい  
 どなみ給へると、後につたへ聞けるに、今さらのやうにれもひ出  
 られて、みな袖をしぼり侍りし。

細々要記興國四年云々去冬より吉野先帝御追福として武家より夢  
 窓疎石を開基として龜山帝の舊蹟に寺を建立す云々山州名蹟誌葛  
 野郡云々靈龜山天龍資聖禪寺云々開基夢想國師本願尊氏公是偏後醍  
 醐天皇の爲御追福依光嚴院勅願云々準上梁の銘太上天皇重仁の字  
 あり時雁應二年己卯始貞和元年乙酉八月九日成○夢想錄曰雁應  
 二年六月廿四日師謂門人云昨夜夢吉野上皇現比丘身乘鳳輦而入  
 龜山行宮秋八月上皇仙去征夷大將軍奉勅建脩道場於龜山行宮云々  
 れもふに夢想の夢に見しハ六月とする時は崩御前の事也松翁の  
 夢に見奉りしは長月の十あまりとあれは少打あひかたし夢想錄  
 に六月とあるハ九月の誤か

先帝の御時辨の内侍新葉といひけるは、右少辨俊基朝臣京極治  
 範の御女なりけり。御父にれくれさせ玉ふ物から、俊基元弘二母  
 君未さへ世をいとハせ給ひければ、三位行氏卿治部俊基朝臣大輔

(八)宗房卿  
 秀句ノ事  
 此物から  
 考ベシ

のもとにおはしまさけるを、先帝御位をかへさせ給ひしより  
 元弘建武御宮つかへし給ひけり、又世の中みどれて、皇居も所さ  
 どまらざりければ、もはなれたまはで、よしのまで参り給ひけり。  
 ある夜、御前に中納言隆資卿四條左中將隆實朝臣男洞院實世卿  
 へり云、宗房卿古關正三房男大其外あまたさふらひ玉ひけるに、み  
 き玉はせむとて、此内侍の御かはらけもて出給ひけるに、いかゞ  
 し給ひけん、とりれとし玉ふて、ふたつばかりにまれば、御け  
 しきのいとあしげあしげに見えさせ給ひければ、とりあへず、  
 さかづきのもまれてぞいづる雲の上  
 どのたまひければ、御心よげに誰かつくま給へかしきべきよし、秀句にとりな  
 させたまひければ、宗房卿、  
 ほしの位の光そへばや

後漢書二  
 即宮上應  
 列星出紫  
 百里

といひ給へるに、興せさせ給ひて、夜も明なむとするまで、御酒参  
 りけるに、山がらすの聲の聞えければ、隆資卿、  
 還幸となくやよしのく山がらす  
 かしらもまろしれもしろの夜や

萬葉集第  
 十四  
 可良須等  
 布於保乎  
 曾押里能  
 麻左低爾  
 毛伎手左  
 奴伎美乎  
 許呂久等  
 曾奈久

ほしの位は殿上人をいふ、頼政集に昇殿の後、四位して待りし時、亮  
 君顯昭よろこひひつかはすとて、ことほりや雲おにのほる君な  
 れはほしの位もまさる也けり、新古今集序ほしの位まつりあそを  
 たすけしちきりをわすれずして、云々など見たり、隆資卿の歌は山  
 鳥の聲を還幸にとりなされたりかしらもしろしは、史記云、燕子丹  
 爲質於秦、不禮乃求歸、秦王同鳥頭、白馬生角、當放子歸、太子仰天哭、感  
 得頭、白鳥馬生角、秦王大驚、乃遣丹於燕、云々、千載俳借、安性法師つらし  
 とて、さてはよも我山からずかしらはしるくなる世なりとも  
 どのたまひければ、いとう御心よげにわたらせ給ひけり。

辨の内侍御かたちいどめでたくさふらひしを、むさしの守高階  
の師直師重男いかなりけん折にか見うめけむ、こころにかけ  
れもひけるに、みかど後醍醐かくれさせ給ひて後、ひろかに御ふ  
み奉りて、しのび出させたまへ、御迎を参らせてんど、度々いひこ  
しけれど、御返しもまたまはざりければ、ねたくれもひて、行氏卿  
同にへかよひける女のありけるをもどめいで、北のかたへにか  
くる事なむ侍る、ともにはからはせ玉ひて、本意とげなんには、志  
らさせ給をむ所をもあまたつけ侍なむ、三位どのと官位をもす  
くめてなど、いひおこすれば、さらぬだに世の中の人のれうれぬ  
はなきに、いとたのもしくきこえければ、御ふみをどくのへ給ひ  
て、内侍の君にもとつかうまつりし梅がえといひし女をうへて、  
ともにはからはせ給へかしときこえけるに、いとよろこびて、命

をかけて契ける侍廿人がほどえらひて、梅がえにうへてよし野  
につかはしけり、内侍の君に梅がえが北方の御かたのふかをの御ふみもちてこ  
といひ入けるに、御戀しうおもひて過わたらせしつるに、こなたへどめさ  
れて、御文奉るに、はるかにかこころさふらはせ給へ、山ざどの御住居  
さこころとれもひやらくことに、袖をこらしほりあへ給はねば、  
御戀しさのいとせめて、すみよしへまうて侍りし程に、道のたよ  
りもしかるべけれさ、あひ奉らんことをおもひて、河内の國とか  
や、高安のほとりにしりたる人のさふらふに、参りてこころ待奉れ。  
そかなき世の中のましてみだれがはしければ、此たびならでは、  
いかで逢見んなどかきて、たまふて

あひみんとれもふこころをさきだて

袖にしられぬ道しへの露

御使も御ふみのこころにかきくどきければ、まことの御母君に  
 すてられ参らせしより、それにもまさりて、おもひたまひし御  
 情のわすられで、朝夕こひしうおもひたてまつれとて、君に御暇  
 を啓（奏）したまひて、とりあへず出させ給へば、女房二人、青侍三人、御  
 供に、かつかうまつりけるに、道に人出あひて、高安にまたせ給ひ  
 けれども、人多くてむつかしければ、住吉までまかるに、こころもし  
 御出も候は、あれまでぐし奉れと仰れかれて候へとて、人あ  
 また出て、とりこめ奉る。いとこころにぬこころに、こころすみよしま  
 であはる。いかにでゆきなむ。御こしをかへせとのたまはす  
 れを、青侍ども御こしをかへしなむとしければ、たゞ住よしまで  
 いうぎ給へどひきたつるに、いかにもかなふまじけれと引と  
 むるを、さなはいはせうとて、三人どもに打ころしてけり。君はいと

おそろしく、鬼にとられ給へる心ちし給ひて、たゞなきになかせ  
 給へり。物のあをれをもわきまへぬものゝふども、情なうこよひ  
 住吉までいうぎなん。殿もそれまでいでむかひおはせむなど、い  
 ひのゝしりて、石川といふ所までいでゆきけり。たて帯正行（正成）  
 門（正）左衛門（五）がよし野殿へめされて参るに行あふて、うのほど過し  
 なんと、かたはしなる木陰よ立しのぶを、心もどなくおもひて、立  
 とまりて、事のさまをひけるに、つぼねがたの住よしに詣させ  
 給ひけるといふに、さてはとて過なんとするに、内侍のなき玉（る）ふ  
 聲をきく、おして御こしのほどりに立よりてとへば、かうく  
 のとになむとのたまはするに、いかさまあやしければ、奏しなん  
 ほどは皆めしとれとて、のこらずからめにけり。恥をれもへるも  
 の三人四人ありて、ぬぎあはせたくかひけれども、つひに打ころ



しぬ。吉野へ参りて、そのよしを奏し奉れば、梅がえをすかしてど  
はせ給へば、ばかりつる事を申けるに、侍どもは皆きられて、梅が  
えは尾になし給ひて、かゝる有さまを北のかたへよく中殿啓せ  
よとて、歸されにけり。正行なかりせば、いと口をしからましき、よ  
くころはからひつれとて、内侍を正行に給へんと、みことのりあ  
りければ、かこまりて、

とても世にながらふべくもあらぬ身の

かりの契をいかでむすばん

と奏して辭しにけり。其時のころえがたくおほへしが、後にお  
もひあはされて、いとをしみあひにけり。

南山巡狩録此正平元年の處に出せり俊基朝臣の北の方今尼にな  
りて行氏の館に居玉ふ母君此比住吉に詣玉ひける後歸るさに河

(十)伊賀局  
化物二遇  
事

内國高安の邊にしろかたありて居給ふ也いとせめて此たひのた  
よりにあひ見すはと御文の心にそへてかくと申ければ母君にあ  
ひ奉らんことをおもひこめ玉へは君にかくと奏し給ひ云とあり  
ていさゝか異りかゝる異本ともちりしにや南山紀行篠峯と葛城  
山との間に水越嶺と云處あり大和河内往來の道にして則正行吉  
野殿に参内せし所也云、

新待賢門院藤公藤女後醍醐元徳三年二月十八日叙從三位建

年十二月廿八日院號延に伊賀のつぼねといふありけり。是は左

中將義貞朝臣新朝田二郎太の侍に篠塚伊賀守平祖未詳或云名重

代といへるが女になんありける。女院の御所は、皇居の西のかた

にて、山につくける所なりけり。去る正平二年ひのどの亥のとしの春  
の比、化物あなりとて、人々さわざおろれ給へり。形をしかと見さ  
だめたるものもあらず。行あひけるものは、心くらくあしく成にけり。

内裏より御との居の人あまた参らせ玉ひて、墓目などいさせければ、うのほどはしづまりにけり。水無月十日あまりの程に、いとあつき比なりければ、此つぼね庭にいでと立給へるに、月のさしいでと、いとあかくりければ、

すゞしさを松吹風にわすられて

袂にやどすよその月かけ

とたれきく人もあらじと、ひとりぢち給へるに、松の梢のかたより、からひたる聲して、たゞよく心しづかなれば、すなはち身もすゞしといふ、古き詩の下旬をいふに、

按可是禪房無熱到但能心静即身凉云々

見あげ給へば、さながら鬼のかたちにて、翹のおひ出たる、けるが眼ハ月よりも光わたるに、たけきものくふの心もきえうせぬべきに、打

此一條啓  
ノ字ヨク  
當レリ

わらひ給ふて、誠にさにこころありけれ、さもあらばあれ、いかなるものにかあるらん、あやしくおほゆるにこころ、名のりし給へどくハれて、我ハ藤原の基任にこころ侍れ。女院の御爲に命を奉りさふらひしよ、せめてはなきあとをとはせ給むことにこころあれ。うれさへなく候へば、いとつみ深く、かゝる形になりて、くるしきこと  
のいやまされば、うらみ奉らんとおもひて、此春の比より、うしろの山に候へども、御前にハおそれて参らぬにこそあれ。此よし啓して玉ひなんとこたへければ、げにさハ聞れよひし、されどうらみ奉るべきことかハ、世のみだれよれもひ過したまへるぞかし。其とよりならを、啓して吊ひてん。さるにても御經法にハいかなるまかよかるべき。心にまかせ侍らんとのためへば、たゞ其ことばかりに候へ、御吊には法華經にしくはあらじ。さればかへりなむ

といふに、歸らん所のいづくにかとの給へば、露と消にし野原にこそなき玉はうかれ候へどて、北をさして光りもてゆくをみれくりて後、女院の御前に参りて、啓したまひければ、誠におもひ忘れてこそ過しつれどて、明日の日、吉水法印に印みことのりありて、御堂にて三七日法華經を供養し玉ひければ、るに其後ハあへてことなることわさもなかりし。うかびてやありつらん。いとたのもし。

按南朝偏年記略に洞院別記を引て云、去年新待賢門院密に京に到玉ひ洞院前右大臣公賢卿の許におはしまし、程なく行宮に歸玉ふしかるを高師直いかなる隙にか見奉りけん奪ひ申さんと路次に人を出して狼籍に及ぬ此御所御供に侍ひし右衛門太夫藤原基任防戦しける隙に女院はこゝをのがれ玉ひ基任は終に討れしよし見ゆおもふに洞院公賢卿は行宮の寵臣にて實世卿の父なり又國母の御身をもてかるくしく歎地に至り玉ふと云こといふか

(十一)同局  
吉野川ニ  
テ高名ノ  
事

し洞院別記といへる文をみされとも後世の贋作かもしるへからす後人刪定を後といへり兼好家集に藤原基任と云人見たりしかれとも考に據なし

この局、一とせむさしのかみ師直が、皇居をおろひ奉る時に、正平年正月防べきたよりのなかりければ、人々猶山深く入せ給ひけるに、

太平記云、武藏守師直は三萬餘騎の勢を卒正月也平田を立て吉野麓へ押寄ける其勢既に吉野郡へ近づきぬと聞ければ、四條中納言隆資卿急ぎ黒木の御所に参て昨日既に討れ候又明日師直皇居へ襲來の由聞候當山の要害の便希にして防へき兵更に候す今夜急に天河の奥加名生の邊に御忍候へと申て三種の神器を内侍に取出させ察の御馬を庭前に引立たれば、主上は萬思召分たる方なく夢路をたとる心地にて黒木の御所を立出玉へは、女院皇后准后内親王宮々を始参らせて内侍上童北政所月卿雲客吏從官諸寮頭八省輔僧正僧都兒坊官に至るまで取物もとりあへず周章騷迷て習

或紀行ニ  
此橋ヲ渡  
サレシガ  
穴太ニ通  
道ニシテ  
今秋野川  
ト云末ハ  
吉野川ニ  
入ルト云  
リ

(十二源中  
紇言北ノ  
方發心ノ  
事

はぬ道の岩根を歩重る山の雲を分て吉野の奥に迷入る云々

女院の御供にはかゝしき侍もつき玉奉らはで女房たちばかりな  
りけりよしの川の橋一けんが程ふみれどしてありけるに、せん  
かたなくて、まなめきれたとせ給へるに、このつぼね、うのぼどり  
の松櫻のれほきなるえだどもを、ひき折後く打わたして、女院を  
おひ奉りて、人々をもわたしはて給けるに、うのどきのおほきさ  
なる枝を、そのへの六郎父祖にをらせて、御覽ありけれども、かな  
はでやみにけり。いといがめしきことにぞありける。今は左馬頭  
正儀の妻よなんなり給ひし。楠正成男正行弟三郎衛門右馬權頭先に詳す  
先帝の御時、源中納言北畠權大納言親房、男源中納言顯家、えちのくの軍を、あまた  
したかへ給ひ、道々を平らげて、美濃の國まで、はしけるよし、さ  
きだちて聞えければ、うへよりはむめてたのもしきとにおほし

給ひけるに、あべ野の泉州露ときえさせ給ひけると、刑部丞友な  
り未考が、うのきはのありさまを、参りてなくくかたるに、ともし  
火のきえぬるやうになむ、人々のこころはなりける。

神皇正統記に云、戊寅春延元三年二月、鎮守府大將軍顯家卿又親王を先  
立申重て打のほる海道の國、悉平きぬ伊勢伊賀を経て大和に入奈  
良の京になん着にける。うれより所々合戦あまたたひ互に勝負侍  
りしに、同五月廿五日考和泉の國にての戦に時やいたらさりけむ思  
孝の道こゝに極りはへりにき昔のしたにも埋れぬものとは唯  
いたつらに名をのみこそとめし心うき世にも侍るかな参考太  
平記卷第十九、青野原軍、顯家卿討死の條に委しければ、今略  
御父の卿は、いかさかりおぼすにか、

さきだてしこころもよしや中々に  
うき世の事をれもひわをれて

北の御方日野中納言資朝女はたゞふしまづませ給ふて、さらに御心ちも  
なかりけるを、さわさておもてに水などうとさしほどに、またの  
日の夕ぐれのほどに、すこし御こくちの出させ給ひて、

玉の緒のたえもはてなでくり返し

おなじうき世にむすほくらむ

なほおなじ道にと、たほしたち給へる御けしきの、いちむるく侍  
りければ、立去玉へで、人々のまもりければ、御心にもまかせ給え  
で、観心寺 河内國錦邊郡 檜尾山 観心寺といへる山寺にて、御ぐとおろして、す  
ませ給へるに、

うむきても猶わすられぬ面影を

うき世の外のものにやあるらむ

こゝに三年が程、過し給ふて、世のさわごも、しばしまづまりけれ

ば、さすが故郷のあたやれもひ出させ給ひけむ。よしの山をたど  
りいでさせ給ふとて、

いづくにか心をどめんとごめむみよしのと

よしのと山をいでくゆく身を

親房卿の御もとに、しをしばおはしまして、あまの字なしあかつきがたに立出  
させ給ひけるに、御名残のつきさせ給ふまじき御正にてありけ  
れば、かへり見させ給へるに、有明月のいとさやかに、山のはちか  
く見えければ、

別るれどあひもれもはぬみよしのと

みねにさやけき有明の月

今按此條錯亂したるならん文のつき解しかたも観心寺にて御さ  
まをかへられて後よし野にかへらせ給ひてみとせあまり過てよ

しのを立出給んとて親房卿にもしはくおはしてあかつきかた  
に立出給ひけるとなくては文義貫きかたし猶考へし

阿部野を過させ給ひけるにこゝなん其人の消させ給へる所と  
つげくれば草の上になふれふさせ給ふて、

なき人のかたみの野への草枕

夢も昔の袖のしら露

このほどりに刑部丞ともなりが世をそむきてありけるをたづ  
ねさせ給ひけるに、いそぎ参りて御ありさまを見奉るに、さしも  
ゆかしくわたらせ給ひける御よろほひの、いつしかかはりれど  
ろへさせ給ひけるにやど、なみだとどめあへで、住吉天王寺東生  
郡荒陵山のほどりまで、御れくり四天王寺に参りて、所とあないしけるに、  
天王寺の龜井の水同寺金堂内龜井流出名白玉のほとりの松の

木をけづらして、

後の世の契のためのこしけり

結ぶ龜友成かの水莖のあと

と書つけ給へり。うれよりともなり入道かへりにけり。一とせ  
尋來りてかたりけるに、いとあはれにおもひ奉りて、そのうち天  
王寺へ参りけるに、御筆の跡のきねもはてずして、のこりけるを  
見参らせて、うぶろに袖をしほりにけるにこゝろ。其後舊都にのほ  
らせ給ひて、母君もどもに世をそむきはしけるが、さきたち玉  
ひて、又のとし興國二年の春、失させ給ひけるとときこえし。日野中納言  
資朝卿の御女なりし。

れなむ比、大納言實世卿の御許へ、わらその御ふみもてきたりけ  
るを見給はせけれむ、

(十四)中納言藤房卿ステ文ノ事

君が住やどのあたりを來てみれを

むかしにぬらすすみぞめの袖

御手もさながらむかしにかはらぬを、あはれとれどろかせ給ひて、御使の童をめしよせて、どはせ給へを、今朝西なる野べにいと、草をかりはべるに、やせれどろへたる修行者の、此ふみどろけてよとおほせさふらひしといふに、いろうぎ皇居へ参り給ふて、大和紀國河内せきくくにみことりのりして、修行者をどめられども、うれどもおほしきもあらざりけらし。中納言藤房入道の御手にてありけり。萬里小路藤原宣房男權中納言右衛門督使別當正二位建武元年十月五日入岩倉出家

按参考太平記云藤房投歌于實世不知何年然次序在顯家死後三年下然則蓋在曆應三四年歟巡狩錄延元三年十月末に出す

刑部卿義助朝臣新田次郎太郎朝氏二男義貞弟次郎左衛門佐の左馬權頭彈正少弼次部大輔兵庫介從五位下

(十三) 藤房

入道高巢山ニテ讀經ノ事

此條貞亨本十三ト前尾セリ同本十五十六ノ條ニアリテ一卷トセリ

越前國よりいまして物がたりに、越前の國たかのすの山はといふところ、は、高くそばたちて、城郭にしかるべきところなりければ、畑六郎左衛門時能義といふ兵ものにまもらせけるに、あかいをしらむがために、なほれく深くわけ入にけるに、谷川のいときよくながれけるを、うの水上をたづねにのぼりけるに、さし出たる岩をかたどりて、松の葉にてふきたる庵の見えけるを、かゝる處にもむむ人のありけるにやと、たちよりて見侍れば、木葉をあつめてむしろとし、たひらなる石の上に、法華經を置ける外にはなにも見えず。しばしありけるに、山路をたどり來る人を見れば、疲衰へたる僧のしきみを手にもてり。いかにしたまふにやかと、物のかくれより見けるに、谷川の水をむすびて、庵のうちにいり、經てのひもをどきけるほどに、よみはじめ給えぬさきに、いろうぎ行て、かゝる御

住居こそいとたどくおぼえ候へ。いかなる人の世をそむかせ給ひけるにやと、くひ奉るに、うこにはいかにとたづねさせ給ひけるほどに、名のりをしつればいと本意なきまして、あづまのものよこそとばかりの給ひて、經をよみ給ひほごしまくに、かへりてさふらへ藤房卿の御面影して待るといひしまくに、いとゆかしくて一條少將をともなひて参りけるに、庵を其まゝありて、僧は見に給はず。經のありつる石ときこにしに、

こゝも又うき世の人のとひくれば

空行雲にやどもとめてむ

按妙感寺に公の書のこと給ふといへるにはよしのゝ住家をいつるとしてこゝも又うき世の人のとひくればとほ山ふかく宿もとめてむとあるよし按此卿はよしのに住給ひしと諸書に見ゆすなほ

たつねまほし

とかきつけ給へる筆のあとを、少將のよく見しり給ひて、うのぼどりの山くをたづねさせ給ひけれども、さらに見に給はねばいとほいなくてとの給ひしを、人々きくもあへ給はで、みななみだおとしてけり。さしもいそじかりける人のきくしかことこの御住居は、誠にありがたき御心にこそ。とし月をあはせて見侍るに、君が住やどくいひこされしは後の事也。こしのかたよりつくしへ通り玉ふらん折にや。うのくちはたえて御おとづれもきかざりし。この藤房の卿は、大納言宣房卿の御子なりし。才智世にすぐれさせ給ひて、君にも御覺の淺からで、中納言までなり給ひしが、建武元年のえ戌のとしの春、俄に世をすて給ひし。

此卿の御履歴は大日本史を初め諸書にいへれはいはす此一段本



書前後して記せる也越前鷹巢山を出給ひてさらに大和のかた戀  
 しくおもはれければ西國にくたり給むたよりによしのに立寄せ  
 給ひて草刈に御文を託して實世卿へおくり玉ひしなるへし天正  
 本太平記には土佐へ渡らんとして浪風に舟覆り身失給ひしよし  
 見えたれとも近おろも御終焉の地と唱る處美作國中谷村に古墳  
 出現して表に萬里小路藤房に授翁禪師靈天授六年八月の日とあ  
 るよし又江州三雲郷三雲村に墳墓ありといへり霞亭涉筆に云高  
 僧傳高泉か僧寶錄皆云藤房夙歸佛乘參大燈國師既出家嗣法關山  
 住妙心寺名宗弼號授翁康曆二年三月廿八日寂齡八十有五聞雪江  
 深妙心寺記東陽朝授翁行狀其說俱同云又聞江州三雲郷妙感寺村  
 妙感寺相傳爲藤房棲跡有公遺像圓顛衲衣手持如意遺詠一帖即手  
 書云與乃字佐乎與曾仁美久毛乃久毛布加久豆流都幾加下也々萬  
 受未乃止母云同云隱其名設其跡公之志也不詳其確實何妨公一朝  
 辭君遠親長逝不返雖卒於名教實出於不得已也方外徒或云公少慕

宗門向上事常有出家之念是害道之言不知公者之論也余曾云南朝  
 之臣忠節之偉可與楠公伯仲者公一人而已景行止之餘謹錄異聞一  
 二以寘巾箱 霞亭涉筆摘要

(十五藏王  
堂炎上ニ  
付御託宣  
ノ事)

### 考參 吉野拾遺下

藏王權現は、役のうはうくの行ひ出させ給へるよりこのかた、  
藏王堂はよしのにあり役のうはそくは文武天皇紀三年五月流役  
小角於伊豆島小角大和人性敏悟通釋典善咒術年世二棄家入葛木  
山絶糧食云々韓國廣足師事之後害其能誣以妖妄惑衆至是竟見配流  
云々はそくは繙譯名義集に云優婆塞肇云義名信士男位士女後漢  
書名伊蒲塞註云即優婆塞也俗なから佛弟子に入たる人をいふ四  
部第一也又涅槃經に善男善女受之歸依則名爲優婆塞云々  
靈驗あらたにわたらせ給ひけるにより、大塔金堂玉をみかき、南  
のかたには金剛力士のたぐせ給へる二階堂。  
金剛力士は梵網經疏に云り今略  
門東には救世觀音の御堂。阿彌陀如來の御堂は西のかたにたぐ

せ給へり。中にも大威徳天神の御社は、日藏上人の冥土にて延喜のみかどの勅をうけ、給ひて此處にいとなませ給へるとかや。

日藏上人俗性三善清行弟也元亨釋書云笙岩聖日藏延喜帝御諱敦仁宇多帝長子云々此條諸緣記又釋書等に見て用なければ略

さしもゆゑしきのきをならべておはしましけるを、正平つちのえのねのとし、む月の比にや、帶刀正行が世をみじかうおもひとりて、ちからのれとろへぬうちに、君の爲、父の爲に打死してむとて、先帝の御廟に詣て、心をひとつにれもひさだめけるともがらの名を書つけて、敵の陣にむかひけるが、多くの軍をねひなひけて後、終にうち死せし、いきほひにのりて、むさしのかみ師直が四萬餘のいくさをしたがつ、皇居をおうひ奉りしに、ふせぐべきたよりなかりしかば、君をばじめ奉りて、猶山深くいらせ給ひけ

るに、皇居をばじめ参らせて、れほくのがらんを焼ほろぼしけるが、誠にあさましきわざなりけり。

按につちのそのうしとあるは誤にて正平三年戊子の年也この一段は太平記廿六卷に委しければ今こゝには要を摘て云前年を云今年兩度の合戦に京勢打負けければ將軍左兵衛督今は末々の源氏國々の集勢なんとにては叶へくもおほえずとて執事高師直越後守師泰兄弟に四國中國東山東海廿四ヶ國の勢をり向られける其勢八幡に着ぬと聞ければ楠正行弟正時一族打連て十二月廿七日芳野皇居に参四條大納言隆資卿を以申けるは今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らむ爲に参内仕候と申もあへず涙を鏝の袖にかけ義心其氣色に顯れけれハ玉顔殊にうるはしく朕汝をもて股肱とす慎て命を全ふすへしと仰出されければ正行頭を地につけ兎角の勅答にも不及是を最後の参内なりとおもひ定て退出し先帝後醍醐の御廟に討死すへき暇を申て如意輪堂の壁板に各名字を書れて

其日吉野を打出て敵陣へそ向ける師直は先正月二日淀を立て翌日三日四條に着正月五日早昼に寄合て勝負を決せんと一所にひし／＼と打寄て師直に寄合て勝負を決せよとよはり閑に歩みて近付たり師直既に引色にも見えける處に九國住人須か木四郎とて強弓の矢つきはや雨の降如く矢坪をさして射たりけり楠次郎眉間ふえのはつれ射られて拔程の氣力もなし正行は左右の膝口三所右の頬さき左の目尻篋深にいられて今は是まてり敵の手にかゝるなとて刺違北枕に伏云々園大曆貞和四年正月六日聞昨日武藏守師直爲攻東條軍勢集來云々楠帶刀正行并和田新發意等自殺梟首云々島津家文書略上今月五日楠帶刀同次郎云々於河州佐々良北所討留也云々貞和四年正月十二日阿曾文書同正月五日正平三年とす本書支干の誤をしるへし又園大略貞和四年二月三日傳聞吉野悉沒落云々矢倉少々相殘懸火之處件餘焰移藏王堂悉成灰燼太子御廟沙金悉披取言語同斷事云々上卷伊賀局の處にもいひたり合

見るへし

神といひ佛といひ二世のくるしをいかにかのがれさふらはんや。かくていくさどもかへりしかば、かたばかりなるかりやをつくりて、本尊をうつし奉るに、衆徒の中に、何がしの法眼とかやいひしが、夜もすがら、おまへにさふらひて、今は佛の御ちからもうせさせ給ひけるにや、かくあさましき御ありさまにこうと、にうはの御姿をひきかへさせ給へる、御しるしもなかりつれとて、さめ／＼となきたまふて、うちねふりけるに、ゆめどもなく、うつとともなく、にうはの御尊躰のあらはれさせ給ひて、よしやたごうらみずともあらなむ。佛をたご迷へる衆生をみちびかんがため、にこう。此土には濟度方便のことにこうあれ。佛ももとは衆生なり。衆生をつひの佛也。罪をつくりしうへにこそ、また罪をもあ

たへめ。さしむかひては本意にあらず。うれとしらるゝ事のなご  
かなからんとて、

うらむなよさてやはやまん梓弓

眞ゆみつきゆみとしはふるとも

といひすてさせ給ふて、あかつきの月の山のはにかくれさせ給  
へるがごとなりけるに、打おどろきて、うのありつる事を、悉し  
くしるして奏し奉らるゝに、人々もおほつかなくおほし給ふて、  
深くをさめおき給ひけるに、かはたしてあけのとし正平四年北よ  
り、尊氏と直義との中らひあしくなりて、直義は御みかたに参り、  
正平五年またのとしの二月のほどに、武藏守が一族をな亡びにけり。

細々要記貞和五年八月佐衛門督直義と師直隙あり是によつて洛  
中騷動云はかりなし同十三日八月師直已下數萬人將軍の居所を

圍是直義卿夜前より彼館におはするによつて也同十四日再往問  
答に及て師直所存の如くなりて事帳本たるにより上杉伊豆守重  
能畠山大藏少輔直宗二人流刑に處せられ師直圍を解て君臣和談  
すと云々同十月廿三日右馬頭義詮將軍長男鎌倉より上洛直義卿の  
政務にかはり天下の權をとらんためと云々中略則三條高倉直義の宿  
所に住せらる十二月直義卿出家すと云々

貞和六年正平五年北改十月廿六日夜左兵衛督直義入道逐電京都  
騷動云十一月七日直義南方へ降参則勅免の倫旨を賜大將軍にせ  
らる云々

觀應二年正平六年正月七日直義入道數千人卒し京都を攻んとす同十  
五日京都守護中將義詮大軍を防へきとなりかた西國に没落其  
砌武藏守師直已下の館十ヶ所計放火すと云々中略同二月十八日直義  
入道將軍と和睦ありて歸洛の所武庫川の邊鷺林寺の前に於て上  
杉修理亮師直師泰兩入道已下十餘人を討すと云々太平記考合すへ

そのをりにさまふふしぎのありけるよし、つたへ聞しかど、見ぬことなりければ、こゝにもらし侍る。直義も君の御力をかり奉りて、わたくしの本意をどげぬれど、また心がはりして、都にかへりけれども、誠の道ならねば、天にうむきて、其秋の比にや、東にて尊氏の爲にころされけるとぞ聞えし。

細々要記正平七年云々傳聞去<sup>六年也</sup>年冬將軍發向駿州薩陀山に陳して直義禪門と度々合戦あり禪門敗北して將軍に降參其後病によつて鎌倉圓福寺に於て寂四十五歳と云々  
東寺長者補任に云觀應二年十月廿五日將軍并宰相中將申賜吉野内裡綸旨爲惠源禪門追討也  
太平記觀應三年二月廿六日忽に死去し給ひけり參考本俄に黃疸と云病に犯されはかなく成給ひけりと外には披露ありけれども

實は鳩毒の故に逝去し給ひけりとそさくやきける悉は太平記尊氏兄弟和睦の條を見るへし

(十六)熊王  
發心ノ事  
己上印本  
一ノ卷ト  
ス

太夫判官赤松光範が<sup>赤松則村圓心</sup>津の國のかためありける時、左馬頭正儀に<sup>正成三男左馬權頭</sup>度々はかられるを、口をしくれもひこめて、過し侍りけるに、去ぬる住吉のたぐかひに<sup>此戦未詳</sup>考討れて失し、宇野の六郎と<sup>未詳</sup>いひしが子に、熊王といひけるが、又ささなきとき、光範にいひけるは、正儀は我爲にも親の敵にてさふらへば、いかにもしてうち侍らん。かうちへこえて、正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、などか心をゆるし申さぬこと、なかるべき。たとへところをゆるすことのはべらずとも、七とせ八とせ程も仕へ候はゞ、うのうちには打ぬべき。たよりの、いかでなからむ。御いとまをこそ給はらめと、涙をながせば、光範もいとあ

はれとおもひながら、をさなければ、敵の國へやらむもこころも  
 どなし。又は命にかはりてうたれしものゝ子なれば、かたみども  
 おもふべけれど、しひてとどめ玉ひけれども、すこしれどなく  
 なりなば、よもちかづけ給はむ、をさなくありなん時参りてこ  
 ど、じきりにのぞみければ、ちからおよび給はで、つねに身をはな  
 ち玉はざりし刀をたまひて、是にて本意とげよとて、阿部野まで、  
 人あまたそへてやらせけるに、それよりは我にひとしきわらは  
 ひとりを具して、赤坂の城にゆきて、そのほとりにたぐずまてあ  
 りけるを、兵庫介忠元が不詳見つけて、いかなる人にやればすら  
 んど、たづねられて、われは大夫尉判官の誤光範のさふらひにて、  
 宇野の六郎といひけるものゝ小子に、熊王といへるものにて候  
 へ、父にて侍る六郎は、去時住吉のたぐかひにうたれて候を、一門

にて侍る備後守が、我をおひうちて、領地を奪ひ候へども、光範と  
 心を合せ候へば、せんかたなくて、いかなる寺へもいり侍りて、僧  
 法師にもなり。父のかあどを吊ひ候えんがために、さすらへ侍ると  
 いひけるを、あはれときとて、まづわがかたにともなひて、さま  
 くくいたはりて後よ、正儀にありつる事をかたりて、をさなくは  
 候へど、心のさかくしくてなど申すに、あはれがり給ひて、めし  
 よせ玉へり。もどよりなさけある人なりければ、熊王もおもひつ  
 きて、れやのあだをもわなれにけるにや、よく宮仕にけり。十五程六  
 になりければ、かうちの國にて、すこしなる所をしらさんといひ  
 けれども、恥ある一矢をもいさふらひてこそとて、辭しにけり。あ  
 くる年の春、父が七めぐりにあたりけるに思ひつけて、こよひ正  
 儀を打て、父の手向にもし、光範の心をもやすめ奉らんとおもひ

たちてありけるに、その日お前にめして、けふは吉日にてあるなれば、元服せよかしとて、和田和泉守名正武左衛門尉にもどまりとりあげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より給はせけるよろひをたまひければ、なみだを袖にかけてよろこぶ。夜に入まで正儀の御前に在けるが、又ふとおもひ出て、打奉らんなれば、こよひころとおもひて、ひざをれし直して、正儀にめをかくれば、年比の情深かりしこと、けふの元服の事などおもひつゞけて、いかで情なく打奉らんとれもひかへして、こころをしづむれば、父の敵といひ、譜代の主君のあだといひ、一かたならねばと、れもひさだめけれども、何心もなくわたらせ給ふありさまを見ければ、御いたはしくて、たへかねけるにや、廣椽に出て、聲をあげてなきさけぶを、人々も正のりもおぼつかなく、れもひ玉ふて、障子をひらき

見たまへるに、ふしとづめるさまの、たゞには見えずありければ、いかにやとくはせ給ひければ、ありつる心のうちをけい申して、どにかくに君のため先君新カの爲父のために、みづから死なんより外は候はずとて、刀をとりなほせば、ありつる人ども、みな涙にくれてありながら、いかでさはあらんと、とりつきてはたらかせねば、力れよばで、その刀にてもどとりおしきり、往生院にて形をかへ、君より給はせる名なればとて、正覺法師とぞいひける。寺の傍に、草の庵をむすびて、もしも心のかはるとのありもやせんとして、往生院の門の外へは出ずして行ひてありけり。光籠より給はせける刀は、ありしありさまをくはしく書そへて、かへしけるとかや、いとあはれなりける事にこそ。

將軍の宮

刊本此條  
マデヲ上  
卷トス  
(二) 康方水  
練ノ



按此宮は護良親王宮世六塔御子陸良親王を申奉るになん太平記御諱を欠て大塔宮と云り同書に此比吉野の將軍宮と申は故兵部親王御子弟天非也本作御母は北畠准后の御妹にてそおはしましける御幼稚の時より文武二道何れも達して見えさせ給ひしかは此宮そ誠に四海の逆浪をも鎮められて舊主先帝の御追念をも休め進せらるへき御器量にたはしますとて吉野の新帝登極の後宣下せられ征夷將軍になし進せらる中自然の事もあらは此宮をこそ大將にもし奉らんすれとて何くへも下し進せられずして武略の爲に惜まれて吉野の奥にそたはしける按制々要記陸良樓雲記同市木なるへし興良親王新葉集に後叛して内裏を焼給ひしかは二條師基是討宮は南都の方へ落させ給ふと見えたる宮なるへし

わかき殿上人あまたともなはせたまひてよしの川にて、鵜をつかはせて御覽ありけるに、左衛門尉康方が坂戸太夫尉わかくり

ける時に、鵜の鮎を喰ふを見て、あたらくここにころ、鳥の喰ふ鮎魚をとりて、まさな事にさせ給へかし。

末一句誤か意通しかたしまさなとは徒然草に小松のねとゝ位につかせ玉はてむかしたゝ人にてたはしましゝときまさなことせさせ給ひしかともあるは今の料理のことなりと谷川士清云り  
 あみころよかるべけれといひけるに、みな人をかしがらせ給ひて、汝あみさはきなんやどのたまはずに、いとさはきなんといふひて、あみをもちていづるに、衣皆ぬぎすて、烏帽子はありしまとにありけるを、緒をつよくしめ、船にのらんとするに、たゞおき給へ此あたり誤いとあやしうと、せいせさせ給へども、何かはとて、あみを打いれけれども、魚ひとつもなかりければ、人々笑ふに、又あみを入むとせしがして、ふまはづすが如くにして、つぶくと水のそ

こに沈けるを、さればころとて、人々さわきて、水に馴たるものどもを、川下のにいれて求さすれども、あへてみえず、暮なばかきり火にて、鵜を遣はつて、螢のれもしろからしなど、おもひ給へる興もつきて、せめてはなきからをだにど、いそねくを隈なく見せさせ給へども、かひなし。またしきがもとへ、人をはしらせなどし給ひ、一時がほども過にければ、人々はかへり給はむといひあへ給へるに、すこし川上のかたに、烏帽子ばかり水の上に見えけるを、あれくといふがうちに、かほばかりさし出して打笑ふを、いかにといはれて、まさなまにせさせ給むほどのものは、あみにてはどめえむと思ひ侍らひて、水うこをもとめ侍りしに、こくもどにはさふらはで、宮の瀧の上の川あたりまでゆきてこそ、れもふほどにはさふらひ給はねど、いひて、うきあがるを見れば、三尺ばかり

りなるすくき鯉似而大開者四聲宇苑云鱖而大青色といふ魚と、二尺餘の鯉七魚和名古比云とを左右のわきにはさみて、ひる子のさまして啓蒙俗號夷三郎者也一氣神也式書云神武社皇長髓彦根津彦有自在神刀術中略天孫亦問此由答云吾是天祖始子蛙子命大神也吾司世富事守暇幸市守賢得幸田守種得幸天軍守戰得幸云天下富持神住廣田云今民家多以惠比須大黒天兩神并祭祈幸福因也既比今同しさまなる一證とすへし岩の上につい居けるに、人々れどろきて、宮にもなきものどれもひなして、あわてさわぎつるさまなど、かたり給ひて興し入給ぬ。其夜鵜をつかはせ、螢をとりなどせさせ給ひて、つどめてうへの御前にありつるすくきを奉りて、康方がことを啓奏し玉ひければ、興ある事にころ、ちかきほどにみゆきありて、御覽しさせ給んど、のたまはせ給ひけるとかや。此康方の父太夫尉康藤源康郷か男がもとに下仕しける女あり

けり。おなじく侍らひける藤六といひける雑色と、心をかよはし  
 侍りけり。彼女いたくいたはりけることの侍りしかば、藤六か居  
 ける山陰の屋にこさせて有けるに、京にありける女の母の、夕ぐ  
 れの程にかゝることのありとききて、いと心もとなくれもひて、  
 とりあへずきにけりといふに、女もいとうれしげに、むかしの物  
 がたりなどしけり。此母いとかひくしくあつかふを、男いとう  
 れしきとにれもひて、このほどのつかれに、心おこたりして、ねふ  
 りおけるに、此女の聲してさけぶに、打おどろかれて、何ゆゑにや  
 といへど、又女はいらへもせずふしおけるに、夢にやありつらん  
 とれもひて、どもし火のかけより見るに、母は枕がみに居てなき  
 居けるを、こゝろ得ずおもひつと、又しばしねふりけるほどに、此  
 たびはいたくさけひて、屋のうへのかたに聞えけるに、うのまゝ

れきいでけれども、どもし火も消失にければ、走り出て聞くに、屋  
 の上より山のかたにさけびてゆく、あまてとよばくるほど、康  
 藤もなに事にかとておはす。外の人もきくつけてあまた入きて、  
 松どもどもして尋るに、うしろの山に、聲につきて行けば、下なる  
 谷よ聲す也。谷にゆけば、かそこらにきこえ、かそこらにゆけば、こゝに聞  
 え。手をわけてさけぶ聲を、しるべにおひゆけば、夜の明行にした  
 がひて、聲もかすかになりて、ほのくくと明にければ、れいどま  
 りにけり。わかちれひける人々の、青根峯腫ぬけの塔の南のかた  
 へ行しもあり。宮の瀧、六田の淀、朝の原などまで、聲につきて行し  
 そ心得られぬ。ありつるねやにかへりて見れを、女は其まゝふし  
 てあり。母は見えずなりにけり。うのこち便につけて、其母のことことを聞  
 侍るに、うの日のくれのほどに、京にてみまかりにけるとかや。な

印本第二  
巻初  
一鷹モリ  
鳥ヲトル

ほこころえられぬとにこそ侍れ。

今上御位につかせ給ひし初つかた後村上年後村上天皇興國元伊豫國大

館左馬介氏明又次郎宗氏男孫三郎左馬のものとより世にためし

なきほどの逸物也とてはい鷹一もと奉られしを和名抄鶴兼名苑云霧一名鷄

野王按鶴音云々波之太賀又古能里似鷹而大納言隆資左中將

正平七年五月賜於八幡陣にあつけさせ給ひてをり御覽し

討死同十一年賜左大臣に

せ給ひけるに誠に勝れたりけり其比皇居のうへなる山のしげ

みより夜なく出てからすの聲に似て内裏にひびきわたりて

なくをあやしき鳥にてあらんと武士に仰て射させ給ひけれど

も所さだめざりければかれもこれもかなはでやみにけり或時

かの鷹を麓の野べにて雉子に合せ給ひけるに雉子には目もか

けで山のかたへうれ行をさしもあしこうれほしめす御鷹をど

(四) 異菓ヲ  
クイテ死  
スルヲ

て行かたにむらがりゆくよしげみのうちに入けるをいかにせ  
んとてまもり居けるほどにつるの大きなるくろき鳥をれひ出  
して空にてくみあひどもにれちけるを人々よりて怪鳥をころ  
してけりかたちハからすのごとくにて左右のつばさをひきの  
ばして見れば七尺あまり有ばかりのけり鷹も胸のほどを喰れてしばし  
のほどありて死にけり夜なく鳴つるはこの鳥にてや有けん  
其後は音もせざりけりいづれにたゞごどにてはあらじとてふ  
たつの鳥を塚にこめてその上にちいさき社をたて鳥塚とい  
ひて當にありけるいとあやしきことにこそありつれ  
おなじ比先帝の御廟塔尾陵のうしろのかたに異木のれひ出け  
るを誰もしらで過にしうの年三尺あまりにのびけるまくに人  
見つけにけるにいかなる木どもしらず木の皮はさらにひとし

くて葉はあつらのやうにて、うれよりはいと大きなり。またのど  
しの春、きさらぎのころに、花の咲けるをみれば、つばきのなりし  
て開たるが、五寸ばかりもあるらん。色はちしほの紅もれよびが  
たきほどになん有ける。しほみちりて、秋の半に實のなりけるが、  
いと大きなる柿のなりして、初より花のいろのごとくにあか  
りけり。ふるき山人あまためし出されて、尋させけれども、しれる  
ものなし。典樂頭も古きふみにも見え侍らずと、奏し奉れど、かく  
あやしきものは、さてありなむとて、まはりをきびしくかこはせ  
て、人をつけてまもらせ給ひけるに、源康村坂戸左衛門康が下つ  
かへのわらは、よるひうかに此實をぬすみとりてくらひけるに、  
あぢはひのかうばしきとは、ものになぞらふべくもあらずとい  
ひけるが、かしらよりあしの先まで、たゞ赤くなりぬると、たとふ

べくもあらず。こちうこなひ、二三日して死にけり。うの木もし  
はすさかりのゆきにあひてかれにけり。いとあやしき事にこそ  
あれ。

(五)兼好法  
師御來談  
ノ一

後宇多院  
御世續拾  
遺集成

おなじ比、兼好法師隱逸傳に云兼好者卜部兼顯子仕建治帝爲武  
後顯迹か深が玉津島にまうで給へるとて、たづねおはせしに、いに  
しへ深く契りけること中なりけれむ、いとうれしくて、むかし今の  
ものがたりしけるに、古法皇后宇多の和歌の道にふかくおほし  
いらせ、御なごけの淺からせ給はで、かしこき御影とならせ給ひ  
し、かなしさのまゝに世にながらふべき心にもあらざりけらむ。  
せめてのやるかたなさに、御後の世をもとおもひ給ふまゝに、か  
くる姿となり侍れども、露の命のき江がたくて、かくらん世をま  
のあたりに見るとよと、袖をしぼられけるに、我も先帝の御情の

とすれがたくて御跡をもしたはまほしくおもひ給ふれども、さ  
すがにれもひかへし侍りて、柴の戸ぼろには侍れども、心はうき雲  
の風にたゞよふらんさまして、はかなき夢路には、ふるさとの空  
にもかよひ思ひとつむれは、西の御空にもあこがれ。春の朝たに  
は、よしのと花の梢にやどり。此の夕べ、哀をおもひつゞけては、さ  
やけき月の影をもくもらせ。もろくも落る木の葉を見ては、はか  
なき世をれもひめくらす袖のむらさめとなりて、うめにし墨の  
衣もむなしく、旅行人をおもひ送りては、まだ見ぬみねをもこゆ  
るにこそ。いかなる縁にもふれ侍りて、人めたえなん深きいはほ  
のほらにも、をさまらでどころ、なげきて過し侍りぬれといへば、  
誠にさにはさふらへども、我一とせ、木曾の御さかのあたりなさ  
すらひ侍りし時、山のたぐずまひ川のきよきながれに、こころと

まり侍りしかば、こころにぞおもひとゞまりぬべき所にこそ侍れ  
とて、

れもひ立木曾のあさ衣浅くのみ

うめてやむべき袖の色かは

家集云世をのかれてきりちといふ所を過しに五句袖の色かなと  
あり寫誤なる事決なし

と詠して、庵を引結て、志ばし侍らひしに、國のかみの鷹狩に、人あ  
またぐし給ひて、山ふかき庵のほとりまでいまして、かりし給ふ  
さまの浅ましく、たへがたかりければ、

あゝもまたうき世なりけりよるながら、

おもひしまとの山ざともがな

同じく家集云心にもあらぬやうなることのみあれば初句すめは

またとあり

どながめすてと出侍りし。うれよりいづかたへころとむべくもあらずとおもひとりて、ふるさとに立歸りて侍れば、世の中のみだれけるほどに、たゞ和歌をともなひとして、心をすまし侍らんよりほかはあらじと、おもひ侍るにころと、のたまはせしに、誠に世をうむくころは、ひとしくころありけれど、うごろに袖をしほり侍りし。

(六)公行朝臣閑居ノ事

長月のころ、よし野を出て、ならの都のゆかしく侍りて、ころかしこみありき侍るに、大安寺辰の北奈良より今の里程半里にあり、迹なりて小庵の本名に日濟寺云々、天皇といへる所に、公行朝臣きさに、詳りの世をいとひいまするを、おもひ出て、たづね侍りしに、ひまあらはなる柴の戸の、まばしがほども住べくもあらぬいたぬ

の水は、水葉にうづもれて、わざとならぬ庭の草むらの色は、さながら霜にけたれぬるにや、風もたまりぬべくもあらぬ志やうじを引たて、いますにや、うのかたに御住居經の聲ぞきこゆるに、よみみてさせ給へるほどを待て、見江奉れば、さしも花やかにわたらせ給ひし御ありさまは、いつちいにけんやせおとろへさせて、香のけふりにふすほり給へる御かたち、涙をうかべさせ給ひて、世の中のつとましきに、ふとおもひ立て、かゝる姿にころ侍れ。そのきはには、人々の佛のみ立ちひ侍りて、世をのがれしかひもなくころと、くやしきのみなんに過し、さふらひしが程ふるまゝに、うき雲のきえゆくころちなんにのみものし侍りて、心の月もすみわたりて、後の世のいとなみより外もさふらはねども父實世の卿のさぞたよりなくおほしなげかせ給ふらんと、おもひ出るたびごとに、

后宮福恩  
寺關白徑  
忠女勝子  
後嘉喜門  
院

またかき曇るにころ。されどよみ奉る御經は、うの御爲に回向す  
なれば、二世ともに御心やすくわたらせ給えむかしと、立歸り給  
はゞ、つたへなんなど仰られて、一夜の程、むかし今の御ものがた  
りして、ほのくどあくるほどに、なくくかへりにけり、此公行  
朝臣を洞院の右大臣殿の御子洞院實世卿男母權大納言實孝に  
て、御おほほいじめしくわたらせ給ひ、頭中將までならせ給ひ  
けるが、辨にて藏人頭を兼たるを頭辨と云羽林家の中にて中今  
上後村上のきさいのみやを、いかなるたまたれのひまもどめさ  
せ給ひけるにや、ほのかに見させ給ひけるに、たへぬ御れもひよ、  
世の中のともれほしわすれて、打ふさせ給ひけるを、志ばしはい  
かなる御なやみにやと、人しらざりけるに、れもひよはらせ給ひ  
けるにや、しのびて御ふみ奉らせ給ふ、

よしの川岩打なみのいはでのみ

玉ちる袖を君に見せばや

御返し

なき名さへはやくながるよしの川

岩打浪のいはでやみなむ

とありけるを、うちもおかせ玉はでながめさせ給ひけるに、御父  
の卿のふどいらせ給ひければ、れどろき給ふて、れきわすれさせ  
けるを見玉ふて、ためしなきことにはあらねども、かくみだれた  
る世にしあれを、君さへひなの御住居にわたらせ給ひて、やすき  
御心もおほすべきかは、まして下としては御敵をほろぼしなむ  
はかりごときを、心にこめてころ誠の道ならめ。うれさへあるに、御  
うしろめたき事にころおもひとまらせ給へ。公泰公冷泉左大臣



の三君をころむかへさせたまはむずれど、いさめさせ給ひける  
を、いといたうはづかしげにれほし入させ給ひし御けしきなり  
しが、うの夜よし野を志のひ出させ給ひて、御行方のしはしはし  
れざりけるが程へて大安寺にいますよし、のきこければ、大臣  
殿よりさましく仰られけれども、こころつよく世をのがれさせ  
給ひけるとかや

洞院の實世公の御女へり云は御心ばへよりは、よめて御かたち  
のいとめでたくれば、しましければ、みかどに奉らんとかしづか  
せ給ひけるを、宰相中將實勝朝臣滋野井參議右中將公尙公男のせちによぼひ  
わたらせけれども、ゆるし給はねば、ちからなく過し給ひしに、春  
の半過行比なるべし、高間の山葛城麓のさくらを、ようながら見  
させ給はんとて、新古よそなからみてや、みなんかつ實世公女

(八)實勝朝臣北方ノ事

房達をともなひ給ふて、山路をたどらせ給ひ、高ねにのほらせ給  
ひけるを、宰相中將の君かねて君の御めのとく、御心をあえさせ  
けるに、てしげみにのかくれいますをしらせ玉は、めでめのとくともよながめや  
らせけり。げよもたかまの山の名もいちしるくころあれ。花はた  
ま雲とみゆるそ、心ありてにやとたはふれ玉へるを、猶かなたよ  
りは、よくころあらめ、しげみを出はなれなば、よしの川も見れろ  
されぬべしといひく、て、こなたへさそふを、實勝朝臣つと出給  
ひて、いはくしわたりして奉りなん、葛城に岩橋を云るは、役行  
者か岩橋を渡すとて、り今役鬼を使し、古事なこなたへとかいおはせ給ひて、めのとく  
ともにかへり給ひけるを、人しらざりけり。さて姫宮ころみえさ  
せ給はねど、人々さわぎて、手をわかちて、谷へや落させ給ひける  
よやど、いはほのかくれは、さましくをもとむれども、かひなし。か

とるれく山よは、天狗などいふものゝつねにすむなれば、とり奉りやしてんとて、谷嶺を越てあされども、いませねば、なくく歸り給ひぬ。日を経て宰相中將のもとに、お給へるとつぐる人のありければ、いきまき給ひて、みかどにうたへて、つみせんとのおまはせけれども、かゝるもだれのうちには、たゞおそしませとせいする人々のおほかりければ、こゝろにもあらでやみ給ひけり。いく程もなく、將軍義詮公一尊氏のもとより、かうし給ふて、都へ還幸をすゝめ奉れば、君は八幡へ皇居をうつされしに、

大平記を考るに南朝與義詮伴御和睦の條に云足利宰相中將義詮朝臣は將軍鎌倉へ下給ひし時京都の守護の爲に残されはしけるか關東合戦の左右は未だ聞えず京都は以の外に無勢なりかくては如何さま和田楠に寄られていひかひなく京を落されぬとおほしければ一旦事を謀て略中吉野殿へ使者を立て略中君臣和睦の恩

恵を施され候は、武臣七徳の干戈を戢て聖主萬歳の寶祚を仰奉るへし按園大曆東寺長者補任此家武奏請者既歷二年尊氏在京と書す猶可義詮依て諸卿僉義有て略中是も又偽て申條子細なく覺れとも謀の一途なれは先義詮か申旨にまかせられ還幸の儀を催されて義詮中尊氏同を追討せられむに何の子細か有へきとて略中御合躰の事子細あらしと仰出されける略中此間持明院殿方に拜趨せられける諸卿皆加名生殿へ参らる先當職の公卿には略中此外同寺社別當神主に至まで我先にと馳参りける間略中正平六年の歳くれてあら玉の春立ぬれと皇居は猶山中なれば白馬踏歌の節會なんとも行れず略中二月廿六日主上己に山中を御出ありて瑤輿を先東條へ促さる同上一夜御逗留ありて翌日纏て住吉へ行幸なれば和田楠以下同上路次を警固なし奉りけり同上閏二月十五日天王寺へ行幸なる同十九日八幡へ行幸成て田中法印坊を皇居になされ赤井大渡に關を居て略中ひたすら合戦の御用意也云々

實勝朝臣も都しづまらば、御むかひにまわりてむと契給て、御どもに参らむと、立出させ給ふ御袖をひかへ給て、

何となく心にかゝる白露の

おき別行袖のけしきは

など、さはれほすにかとて、

別路の露にはあらぬうれしさを

やがて袂につくみころせめ

といひなぐさめて、ころづよく立出給ひけり。かくて歳の半ほど、御心を雲にやどして、待わひさせ給ひしかひもなく、八幡にて討れさせ給へると聞せ給ひしより、

大平記南帝八幡御退失云の條に三月十五日より正七年軍始りて既に五十餘日に及へは城中には早兵糧を盡し援の兵を待方もな

し角てはいかゝ有へきやとさゝやく程こそあれやかて人々のけしきかはりてたゞ落支度の外はするわさなし略中さらは今夜主上を落し参らせよとて五月十一日夜半はかりに主上をは寮の御馬に乗進らせて前後に兵とも打圍大和路へ向て落させ給へは數萬の御敵前を横切跡に付て討留参らせんと議する依て命を輕する官軍とも返合せては防略中討死する者三百人に及へり其中に宮一人討れさせ給ふ巡狩見録を討取と記せり何帝の御子なるにか今書裁かした四條大納言隆資卿圓明院大納言三條中納言雅賢卿も討れ給ふ同云頭中將具忠朝臣參議中將實勝卿之姓名太平記と主上は軍勢異同あり今暫く所見の及所を諸書によつて記せり

さればよろの別路の、何とやらん心にかくりてれぼ江しがかゝらむ事にころ。今はながらふべくもれぼ江ぬ也。ちざりはじめしその折からは、我心をあはせて、あられぬわざをしたまへると、う

とからぬかぎりにはれもひおとされぬ、たのむべき人はむなし  
ければ、れもひさだめにけりど、かきくどき給ひければ、めのどの  
侍従、さおほしたまへるともかひも候はじ。かゝる事もためしな  
きにはあらずなど、いさめて、まことにはれもひたち給はじと、す  
こしおこたりけるひまに、うかれ出させ給へるりが、夕ぐれのほど  
なりければ、さらでも道のおほつゝあなきに、川音のかすかなるか  
たをしるべにて、なつみの河のほとりに、たどりつかせ玉へども、  
月さへうとき山陰のほたるをよすがにたのみ給ひて、岩のおも  
てにさだかならねど、

山陰のくらきやみ路にまよひなむ

なつみの川に身をしつめなば

と書つけ給ふて、御身をしづめたまひけるに、御跡をたづねもと

めけるものゝ、あまたつどひて、松どもどもして見けるに、あへな  
き御かたちの、岩のはざまにかゝらせ給へるを、とりあげ奉るに、  
はつかに御いきのかよはせ給ひけれども、御かほの色もかはら  
せたまへるに、皆涕おとしてさまゝに、とりあつかひたてまつ  
れば、やうく御心のつかせ給へるに、や御目の少しひらけられ  
ば、皆喜てかへりけり。御心ちのつかせ給へるまゝに、御なげきを  
れほしいでさせ給ひて、せめては御さまをかへ給はむと、しきり  
にの給へば、せんかたなくて、御心にまかせ奉りてけり。あさまし  
くみだれぬる世の中には、かゝることさへかざるひにけりど、い  
どかなしくころ。

平三位行輔卿鳥丸平城のしのひていひかはしたまへる女の、京  
にすみけるが、秋の半の比いひれこせける、

れもひかねうなたの空をながむれば  
我にたぐへる初雁の聲

御返し

わが袖を猶しほれとや初雁の

つばさにかけし露の玉づさ

(十)鼻高キ  
狂歌ノ事

内大臣實守公

左大臣實泰の節會の内辨和訓琴元日の式に

内辨と稱諸公事に上卿とをつとめさせ給んとて、いざたぐしく

稱す庶事を辨備するの名をつとめさせ給んとて、いざたぐしく

つくろはせ給ひて、参り給ふ道にて、紀國よりはじめて参りける

武士どもの行あひ奉りて、あなおよろし、山伏とも見えす、まして

人にああらむ、天狗のたぐひにてあるらんどいひけるを、きかせ

給ひて、

天狗ともいはざいはなむいはずとて

はなひくからぬわが身ならねば

きはめて御鼻の高くわたらせ給ひけるを、いひあてにけりとの  
ちにをかしがらせ給へり。

高野山より、うねむ法師のたづねいまして、あか棚にありける松  
茸を見給ひて、

いつかそとろのあかつきを松たけの

ひらくるのりにあはんどぞおもふ

どの給へせしほどに、

松たけのひらくる法にあふことも

うのあかつきの雨のうるほひ

按彼龍華三會の晨をいへる也

(十一)松茸  
歌ノ事

(七)犬王丸  
山賊ニア  
ウ事

隆俊卿四條隆資男内大臣のものとに、めしつかひ給ひし犬王丸、山  
たちにあひて、矢にあたりなむとしけれども、やうくしにげのひ  
て、といきもつきあへず、かたりけるを、どのきかせ給ひて、

梓弓引てしたへる山たちへ

犬追物といふにあらむらな

とてをかしがらせ給ひけり。

(十二)楠墓  
落書ノ事

楠正行の墓處に、いかなるものとしわざにやありけむ、南水誌に  
云在河内  
讚上郡早可新屋東後人裁南樹一株於書付ける、  
冢上文化四年里人建碑村瀬之熙撰文書付ける、

くすの木のとるしを來てみれば

まどに石と成にけるかな

諺に云南水はよく石に化する  
といへはかくよめるならん

(十三)漣村

瀧口長重が武藏守師直か皇居正平三年をおろひなんとしける時、いちへ

長重狂歌  
ノ事  
瀧口長重  
津久井平  
長重瀧口  
左衛門尉

やく落行けるをしらで、跡にて尋られけれども、見江ざりければ、

源康村坂戸の上  
に云り

みよし野にありときこし瀧口か

おちては名をもなかしけるかな長重

といひけるをつたへきくて、やすからずおもひ、いかにもして此  
返しをせんとうかぢひけるに、よしの川の水上のほとりのさか  
ひを、山人のあらうひてうたへけるを、康村に仰られて、さかひを  
見にゆきてかへりなんとするに、年老にければ、しばらく打やす  
みくしける程に、うたへ人はよく参りて、けいたん所検断所待わ  
けるほどに、大理のやすむらを尋させけれども、いまだかへり給  
はずといふ。はるかにまたせて後にかへり來て、志かぐなんと  
いひけるを、

よしの川其水せとをたゝすみの  
老にけりとてなどやすむらん

といひし。いどをかしかりし。

(十四)右馬  
允行繼遊  
世ノ事

二條關白殿師基太政官兼基公二男正平六にありける右馬允行  
繼といひけるハ、去る八幡の戦に上平七年也正いかなるをかありけ  
む、かへらせ給ひて、御勘氣有ければ、をさなき子ひとり、女子ども  
を、むつたの里に、したしきものゝ有けるにあづけて、高野かうやの山  
にのほりて、かみおろしけり。三年ばかりありてわが庵松翁の庵に來りて、  
あめしづくとなきけるを、いかにとくへども、いらへもせで、心の  
ゆくかぎりなきで、起なほりいひけるは、諸國修行の心ざし侍り  
て、高野を出侍りしに、さすがに過しがたくて、六田のあたりを、よ  
そながらも見なましとおもひて、そのほどりきをさすらひ侍りし

に、あたらしき塚の前に、十あまりなるわらはの、ふしとづみてな  
げき居けるを、あはれなるさまの見過しがたくて、いかにとくひ  
侍りければ、父は三とせばかりさきに世をのがれて、いづちども  
なく出給ひ、御おとづれも候はぬを、母君のあけくれなげき給ひ  
しあまりに、御心みだれて、すぎつる夕ぐれのほどよ、まされいで  
させ給ひて、河よどのほどりへ、身をしづめ給ひしき、人々のなき  
からを尋ねて、このつかにこめさせ給ひて候へども、したしかり  
つるもうとくて、御跡をとふべきたよりもなく候へば、一かたな  
らぬかなしさに、かくて候也。御經をよみて給ひてんといひし、佛  
の、見しこくちしければ、あまりかなしくおぼえて、いかにめぐり  
來にけむとくやしきまでにおもひ候ひながら、こくろづよく經  
をもよみ、念佛手向て、草の陰にはいかゞれもふらんと、れしはか

るにも、涙にむせび、のこしおきけるわらはのさまを見るにもたへがたく、めもくたげられ候はざりしを見て、日もくれにければ、いざわがやどへと、いざなひさふらひしほどに、行方のこころもどなく侍りて、ゆきさふらひしに、すむべくもあらぬほどに、あれはてと、むかしさふらひしつかへ人も、いかになりぬるにや、たゞひとりのみすむなる。またしき人はれをせぬにやととへば、まづしくなり行まゝにとそぞ侍り。むかしつかひし女の、このあたりへのこりて、朝夕のいとなみをして、あたへぬるをかりにてこそ候へど、夜もすがらかたりけるは、皆我身のうへのことなりけり。夜も明なんとしければ、かの女のきたりなば、見わすれぬ事もやあらましとおもひて、はか所よて経をよみてん、かへりこむほどに立寄なんといひて、たち別れ侍る。この心のうちをれしはあり

(十五) 中納言局ノ歌ノ事

玉へかしとかたるに、ともに袖をぬらし侍りて、げにもかゝるほどは、候らそ去。行へしられず出給ふとも、玉の緒の絶給はぬほどは、わすれたまそむ。後の世をさまたぐるにぞあらん。奏し奉りてん歌謡あるべし玉へとのへ奉りてむ。こころやすく、後世ねがひれはせよかしといひければ、いどうれしげにてかへりけり。何どかたさかりけむ、やがてくして來りけるを、ありつる事をけいして奏歌ともなひつれば、いと不便よおぼして、御身ちかうめしつかはれて、この比は右馬允行朝と名のりて、むらなき剛の者にてありけり。正平みつのえのたつの年七年也の春、舊都の主上崇光院本院光嚴新院光明ともにとらはれ人とならせ給ひて、

参考太平記に崇光主上と稱する事按觀應二年尊氏發崇光帝南朝加太上天皇號由之見之時不可稱主上當言新院皇年代略記稱光嚴



光明崇光日兩上皇新院者爲得

此山にいらせ給へるに、黒水の御所のあさましきになほうのほかにうはらからたちをひまなくうゑたるうちにおしこめ奉る。誠に見るめもいとかなし。さくらより外に御なぐさめもなかりけるにや、中納言のつぼねの、

かゝる世もよしやよしのと山ざくら

やどのものどてかざしにもせむ

どううし給ひけるときとて、世中のはかなき事を、花におもひなぞらへ侍りて、

かくばかりうつればかはるみよしのと

花見てくらす身ころつらけれ此歌作者不考

此一條は前に云南帝八幡御退出の前の事にて將軍義詮江州落の

中納言局  
隆蔭卿妹

ときのとまれは讀者年月を推て可見太平記持明院兩院主遷幸吉野の條に云去裡に敵は都を落たれども吉野帝は洛中に臨幸もならず只北畠准后顯能卿の父子はかり京都にたはして諸事成敗を司り玉ひて其外の月卿雲客は皆主上の御座に附て八幡にう伺公し玉ひける中同廿七日二月平七年閏北畠右衛門督顯能天正本親堀兵五百餘騎を卒して持明院殿へ參り先其邊の辻々門々を固めさせければすはや武士ともか參て院内を失ひ進らせんとするはとて女院皇后御心を迷して伏沈ませ玉ひて此彼こにさまよふされとも顯能卿穩に西の小門より參て四條大納言隆蔭北條家隆蔭家隆本主の子也此時を以世の靜り候はん程皇居を南山に移し進らすへきとの勅定にて候と奏られければ兩院主上東宮あきれさせ給へるはかりにて兎角の御言にもおよはず只御涙にのみしほれさせ玉て羅穀の御袂もしほるはかりになりて良姑有て新院御涙を祀さへて仰られけるは天下亂に向ふ後僅に帝位を踐と云へとも叙慮

より起し事に非ず一事も世の政を御心に任せず略中速に釋門の徒  
と成て邊鄙幽居を占せんと思此一事具に奏達あるへしと仰出さ  
れけれども顯能再應の勅奏にも不及已ふ綸命を蒙る上はれして  
如何奏聞を経へきとて御車を二輛差寄餘りに時刻移候と急けは  
本院新院主上春宮仁直御同車ありて南の門より出御なる略中御幸成  
たれば夜は早ほのくくと明はてぬ此ふて御車を馳て怪しけなる  
網代興に召替らせ日を経て吉野奥加名生と云所に御幸なし奉る  
此邊の民ともか吾君と仰奉る吉野の皇居たにも黒木の柱竹の椽  
圍ふとかきほの暫たにも住ぬへくもなき宿なり

(十七)嵐山ノ事

彌生の比、日のうらくかなるに、女院後醍醐帝妃の御所の御庭に、散  
つもりける花の、いと多かりければ、どものみやつこめさせ給ひ  
主殿察のて、一とところに集めさせ給へば、高さ五尺ばかり程の山  
のなりに在けるを、いと興せさせ給ひて、よしのと花をうつせし

山おればと、あらし山と名づけさせ給ひて、山州名跡志龜山院嵐  
ふとめ給人々に歌よませ、上にもけいし給ひければ、あすのほどに  
わたらせ給ひてんと、のたまはせ給けるよ、うの夜、風のはげしく  
吹て、いひかひなく成にけり。つとめて辨の内侍のかたへ、上云に兵  
衛のすけのつぼね、

みよしのと花をあつめし山の名も

けさとあらしのあとにころあれ

とありけるを、ううし給ひければ、

千早振神よもきかず夜のほどに

山をあらしの吹ちらすとは

梶井二品親王後伏見院皇子尊胤親王二品天台坐主冊治部どら  
はれさせ給ひて、この山のあさましげなる、しへの庵にすませ給

(十六)伏見山ノ事

ひけるを、太平記に金剛山の麓山本の三郎考未といひけるもの、うけ  
 給りて、きびしくまもりけり。二とせばかり有て、御邪氣のこゝ  
 ちの目にそひて、れもらせ給へるといひのゝ去りて、嶺を通る山  
 伏もがな。れこなひさせてんといひあへれば、守りける武士ども  
 打ちりて尋けるに、その明の日、尊げなる山伏を、三人具して参り  
 ければ、よろこばせ給ひて、御枕上にめして、行ひしけるに、二日ば  
 かりありて、御心のさはやきけり。と御布施など給り、守ける武士  
 共、御歡のみき給はせければ、夜ふくるまでうたひなどしてあそ  
 ひをりけり。山伏は曉立なむとて、御暇を申て、まだくらきにかへ  
 りけり。ひるのほどにや、宮のれはしまさぬとさわざて、關々へ人  
 を走らし、山伏をとどめけれども、それよりさきに通らせ給ひて、  
 うの夜興、福寺までつかせ給ひけるとかや。これは御門徒の律師

(十八) 寛成  
 御子 鷹狩  
 ノ事

元祐といひけるもの、かねてはかりて、れのれ山伏となりて、笈を  
 れほきに宮のかくれさせ給へる程に物しけると、後に聞えし。う  
 れより皇居をいよく、かたく守りければ、さまざまはかりけれ  
 ども、せんかたなかりしとかや。  
 ひろなりの御子後村上天皇第一御子或第二世に長慶院と申の、  
 いまだをさなうおはしましける時に、わかき殿上人あまたども  
 なはせ給ひて、なつみの河よどのほとりにて、鷹つかはせて御覽  
 ありけるに、かたはらにいとおほきなる岩の、えもいはれずおも  
 しろきに、小松の生いでたるありけり。みて御覽しさせて、この岩  
 をかへりなん時、皇居の御庭にもて参れ、うへに奉らむと、實爲中  
 將河野實にのたまはせければ、をさなき御心をおしはかりて、御  
 事うけさせ給ふ。鳥などあまたとらせ玉ひて、かへらせ給へる

時に、忠行侍従に岩をさすれ給ひしと、のたまはせければ、民部大輔がちからもつよく侍れば、御あとよりもて参り侍ふ也と啓して、皇居にいらせ給ふ。御鷹の鳥など奉らせ給ふて、實爲中將にありつる岩をどめさせ給ひけるに、忠行の侍従のおほせごとをうけたまはりぬと、けいしたまへば、侍従をめぐしていかにとたづねさせけるに、民部大輔の御あとより、もて参らんといひつゝ、民部侍るをめぐさせ給ひなんとのたまをせて、むつがらせ玉ふて、中將にこそよくいひつれ、などさはいふにかとしほらせ給ければ、中將のありつるを啓し玉へば、をかしがらせ給ひて、誠におもしろからむ、岩こそ見まくほしけれ、民部がちからこそゆゑしけれを、もてきなんに、めさせ玉へとのたまはずに、中將立たまひて、民部大輔にかゝる事なんある、いかゞしてむとの給へば、すべきことこ

うあるれとて、御庭にありけるちいさき岩に、松の枝を取つけて、中將といとおもげにもちて、宮の御前にすゑたてまつれを、ちいさくこそあれ、それにはあらじと、なほむつがらせ給ひければ、民部大輔、さればこそ、その岩をもちて、うへの山をどほりさふらひしに、右左より山のさし出て、道のいとせばき所にてかなひがたく、いかにせましと、たゞよひ侍りしに、むかひのかたより山伏のきたりけるが、岩にせかれてどほられぬにこそ、のけ王へどのくしりけるほどに、我もせんかたなさに、かくて侍る、いかにせましと、わびあへるに、さらばすべきことこそあれとて、すくをおしも、何やらんつぶやきていのるにしたがひて、このいはちいさくなりて、やすくとほりてさふらひしほどに、山伏も行過しをよびかへして、もとの如くにいのりなほしてんといひければ、また

行ききにほそき道のいますれば、いかゞし給んといひしほどに、  
げにもとおもひ侍りて、そのまく持て参りぬといひたまへば、う  
へよりはじめてありつる人々、をかしがらせ玉ふに、宮の御けし  
きも、いとよくならせ給ひて、げにさもあらんことなれ、その山伏  
をめしかへせかしたのたまはずに、をやをるかにゆき過て、いづ  
ちゆくらんもしらずとけいし給へば、ほいなきことにこそ、あれ  
どなめて民部大輔の大きなる空ごときを、すこしきやうにいのら  
せむものをと、の給はせける。誠に行末たのもしき御ことにこそ、  
いとせめて覚え侍りし。

過つる年の春の末つかた、天照大神にまうでく、三七日がほど、  
法施奉りて、かへさに中納言顯能卿親房男の御もとへ立よりて、  
一夜がほど、むかし今の御物がたりしけるに、世の中のかくみだ

(十九) 天照大神  
宣旨ノ事

れぬること、人の國にはためしおほかりぬべけれども、わが國に  
は是ぞはじめならん。いつかはしづまるべき。かゝる折ふしに生  
れきぬらん過世のつたなくてなど、わびあへるに、誠にさこそお  
そすなれ。されども御敵はほろびて、終に還幸ならんどこそおも  
ひ奉れ。今上のいまだ陸奥守にて、あづまへおもむかせ給んとし  
玉ひける時、設の君にたぐせ給むくねを、ひうかに申きかせたま  
へり。建武つちのえのうしの年今考つちのえとら七月の末つか  
た、伊勢の國へ越させ給ひて、大神に御いとまを申しにまうでさ  
せ給ひければ、どなまらせ給ふべき、御つげのわたらせ給ひけれ  
ども、かくいでたぐせ給ひぬるうへはとて、あまたの御舟よろひ  
して、九月のはじめつかた、上總の地ちかく、御舟のつき侍りしに、  
いさゝか空のけしきのかはりてみゆるまくに、浪風あらく侍し

かば、あまたの舟ども、伊豆の御崎にたゞよひ侍りしに、猶風のつよく吹もてきて、船どもものちりくくになり、おなむところにあるし船の、ひたちのかたまで、ふかれゆきしもあるに、宮の御船へ、その日のくれほどに、伊勢の海までふきもどして、うれより吉野にいらせ給ひしに、程なく三くさの御たからをつたへ給ひて、天つ日嗣をうけさせ給へば、何事も大神の御はからひにこそいますかりけれ。われも宮の御舟にさふらひて、まのあたりのことに候へば、たのもしくおもひて過し侍ると、かたり給ひしに、こたひまうで侍りしを、神ものうけさせ給ふ御神託にこそあれど、れもひつゞけて、いとたのもしくかへり來にけるにこそ。

神宮正統記に云陸奥のみこ又東へむかはしめ給ふへき定あり親王は儲の君にたゞせ給ふへきむねを申きかせ給ふ道の程もかた

しけなかるへし國にてはあらはせ給へとなん申されしかく定め給ひぬるも天命なればかたしけなし七月の末つがた伊勢に越させ給ひて神宮に事の上を申て御舟よそひし九月の初ともつなをとかれしに十日比のおとにや上總の地ちかくより空のけしきおとろくしく海上あらくなりしかは又伊豆の崎と云所にたゞよはれ侍りしにいと波風おひたゞしくなりてあまたの舟行かたしらす侍りにけるに御子の御舟はさはりなく伊勢の海につかせ給ふ顯信朝臣陸奥守軍介は本より御舟にさふらひけり同じ風のまきれに東をさして常陸の國なる内の海につきたる舟侍りき方々にたゞよひし中に此二の舟おなじ風にて東西に分吹わける末の世にはめつらかなる例にそ侍き儲の君にさたまらせ給てれいなきひなの御住居もいかゞおほえしに皇太神のともめさせ給ひけるなるへし後に吉野へ入せましくて御目の前にて天位をつかせ給ひしかはいとゞれもひ合せられてたふとくも侍るか

な云々

正平つちのえのいぬのとしの春草のいほりの夜の雨によしの  
く花の露をしたらてくよしなしとを書つらね侍るこそものくる  
をしけれ。

隱士 松 翁

按正平戊戌は十三年也巳とあるは誤なり群書類從本右吉野拾遺  
上下二卷以所藏舊本書寫以屋代弘賢藏本校合筆流布印本偽造爲  
四卷其第三第四文體不同且記不與吉野事特載發句成係宗祇法師  
作則後人竄入不待辨可知也

貞亨四丁卯歲正月吉辰北村四郎兵衛板行本に

勘物

右茲奥書一本有中卷古來依稱吉野拾遺物語三卷後人得不足二  
卷之本而補下一卷加奥書爲證者然又其後人依文詞參差以奥書

入中卷其不審也傳聞松翁者兼好和歌門人也依之奥書全誌徒然  
草之詞堪笑云々

○作者古來此物語松翁又名不詳作也仍考兼好法師來誤事之章師  
弟無極唯稱故友而已者非松翁作歟或說侍從忠房作也上卷まさし  
く御供にさふらひて見し事にこそあれ故有拾遺物語之歟共不詳  
○闕卷上卷自後醍醐天皇崩御之已前起中卷之末紀後村上院儲宮  
事畢依之按此書者後醍醐帝之事紀也者發端爲闕如事必らず其間  
依爲隨筆頗混雜矣

甲子冬十月既望遂書寫同連夜於燈下以類本校正畢

### 参考吉野拾遺跋

吉野拾遺は、何人の著るか知らず。されどもその文の  
めでたく、その思ひ入れのけ高きは、か乃山の花にもた  
ぐへつべくや。ころごろ國語科乃用本竹取物語、語徒然草  
のたぐひ、多かれども、あるはあまりに事ふり、ひたぶる  
に佛をみたるもまゑりて、普通教育に用ゐむには、打傾  
かるゝふふおきにしもあらむ。わが故郷ある小山多平  
理翁は、わかき時より、この學びに心を用ゐられ、いまは  
七十とこえられたれども、猶著述校訂等に力をつくさ  
れぬ。二年ばかり前、おのれ歸省して、翁乃もこそをたづね



二  
しここありしが、見せられし校本ども、あまたありき。その中にて、この吉野拾遺の参考本をここに心ひかれてはおぼえき。さるはあまたの異本どもを、あつめて、校訂せられ、更にそ乃考證をふるべきものさへ、添へられたれば、かの群書類従に、收めたるものよりも、いこく正しく、読みこきやすきればなり。さればかへりて後も、この書の事、常にわすられざりしに、ととし春のころ、翁の門人黒川稜威臣氏、その校本をうつしこりて、はるくおのがもこにおこされり。いこうれしくて、再ひくりかへし見るに、いよくおもしろければ、やがて六合館の主人にわたらひ、更に翁にもいひて、こゝに出版する

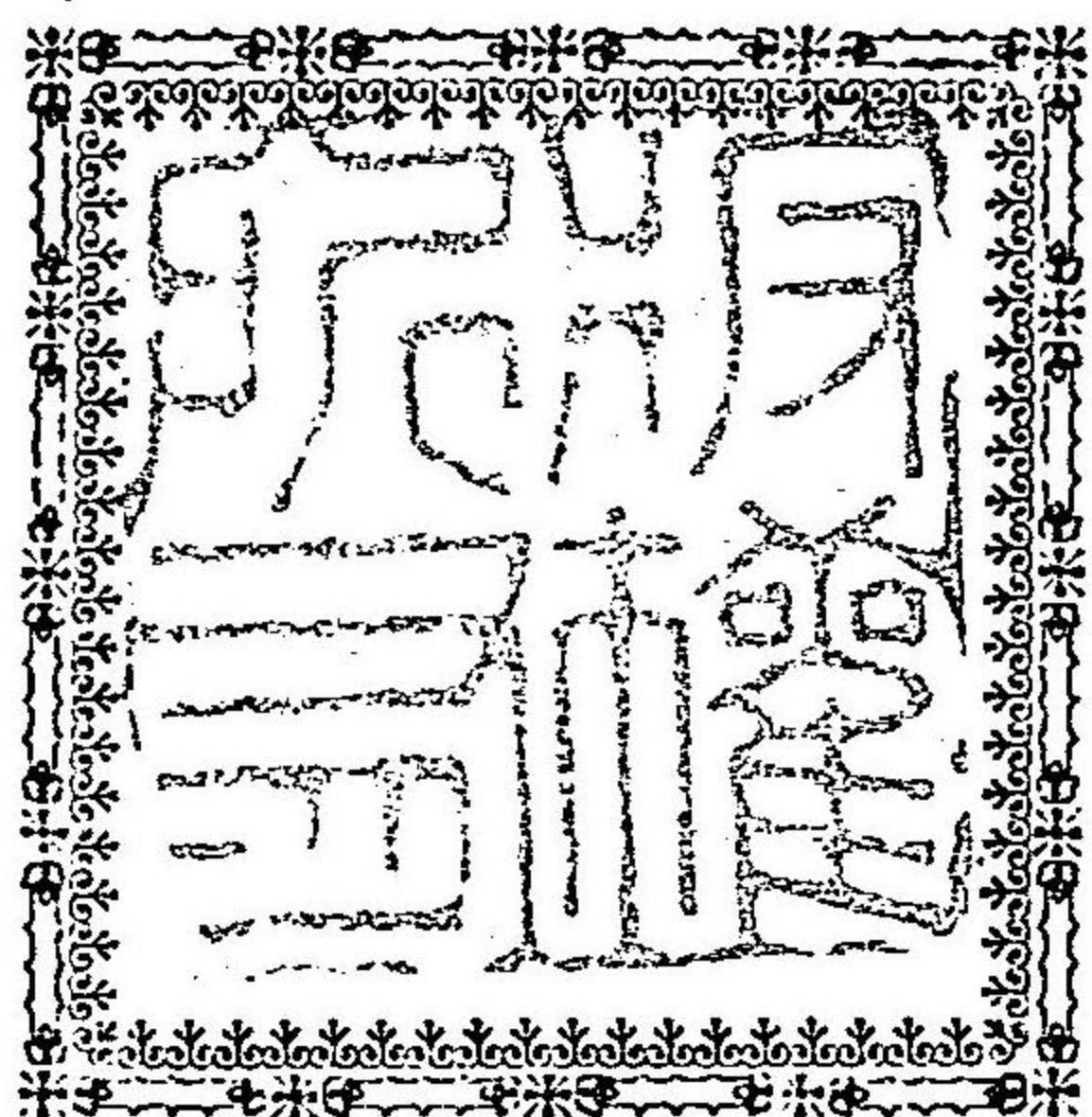
三  
こゝはふしぬ。あはれこの書よ、かの世をばかなみ佛  
志みたるこは、かはりて、読みもてゆくまゝに、おのづか  
ら吉野の行宮乃御事さへ忍ひまつられ、腕さすられ、齒  
くひまばられ、涙かかれ、腸ちぎるゝこゝろも多かれば、  
教科用として、その益するこゝろ、いかに多からむ。ま  
して、その文のめでたく、にほひやかかるは、やがてかの  
山の花にもたくふべきものあるをや。

明治二十七年六月二日

小中村 義象

しるは

明治廿七年六月三十日印刷  
明治廿七年七月三日發行



校訂者

小山多乎理

熊本縣肥後國飽田郡池田村  
五百五十九番地

發行者

弦卷彦之丞

東京市神田區表神保町  
貳番地寄留

印刷者

齋藤章達

東京市日本橋區兜町貳番地

印刷所

東京製紙分社

東京市日本橋區兜町貳番地

東京市神田區表神保町貳番地

發行所

六合館弦卷書店

# 國文歌書目錄

華族女學校教授

關根正直先生著

訂正  
六版

國語學

全一册

郵正稅價  
金金  
六三十  
錢錢

華族女學校教授

關根正直先生著

再版

國語學參考

全一册

郵正稅價  
金金  
二十二  
錢錢

文部大臣井上毅君序  
華族女學校教授

關根正直先生纂輯

增訂

國文教科書

全二册

郵正稅價  
金金  
六十  
錢錢

華族女學校教授

關根正直先生纂輯

教科適用國文叢書

近刻

文學博士 黑川真賴先生序  
第一高等中學校教授 久米幹文先生序  
全 小中村義象先生標註

吉田兼好法師肖像及自筆之詠歌石版摺

標註徒然草讀本

全二册

郵正稅價  
金金  
六四十  
錢錢

從二位勳二等伯爵 東久世通禧公題字  
故 佐々木弘綱大人標註

文學博士 小中村清矩先生序  
清少納言肖像石版摺

標註枕草紙讀本

全五册

郵正稅價  
金金  
八十二  
錢錢

御歌所長從三位勳三等男爵高崎正風大人序  
日本弘道會々長從四位勳三等西村茂樹先生序  
第一高等中學校教授 小中村義象先生  
華族女學校教授 關根正直先生 標註

●標註榮花物語抄

第一高等中學校教授 小中村義象先生 共輯  
第一高等中學校教授 增田于信先生

●國風

故佐々木弘綱大人遺稿  
男佐々木信綱先生校正

●歌詞遠鏡

帝國文科大學教授物集高見先生著

●かなづかい教科書

同

●てにとは教科書

佐々木信綱先生標註

●十六夜日記讀本

同

●標註庭の訓

全六册

正價金一圓二十錢  
郵稅金十錢

全二册

前編正價金五十錢 郵稅金六錢  
上製同金六十五錢 郵稅金八錢  
後編 近刻

全三册

正價金八十六錢

全一册

正價金二十二錢

全一册

正價金二十五錢

全一册

正價金二十五錢

全一册

定價金二十六錢

●つれぐさ

吉田兼好著

●古今和歌集

石川雅望輯

●雅言集覽

(シヨリなマデ)

大八洲學會藏版

全二册

定價金二十錢

全二册

定價金二十錢

全九册

定價金二圓

●六國史校本

大八洲學會訂正

日本書紀全二册既成

全十册 一册二付

正價金六十錢  
特別上製 金九十錢  
同和裝 金一圓廿錢

●古今集講義

本居豐顯先生講述

初編上中下二編上ノ四册既成二編中近刻

全部五篇 十五册ニテ完結

壹册ニ付 正價金二十一錢

●大八洲歌集

本居豐顯先生撰

●日本號の考

全一册

正價金二十五錢

全二册

正價金四十錢  
和裝上製 金八十錢

水村正辭先生著

●萬葉集書目提要

全一册 正稅價金三十五錢

久米幹文先生著

●大八洲史

全部五編 一册二付 正稅價金六十三錢

全

●今昔字治抄

全一册 正稅價金四十二錢

飯田武鄉先生著

●日本書紀通釋

全部三編 一册二付 正稅價金四廿五錢

上編一、二、三、四、中編一、二、六册既成 下編近刻

小杉楹邨先生副註

●副註榮花物語

全部十五册 一册二付 正稅價金二十錢

一、二、三、四、四册既成 五卷近刻

栗田寬先生著

●莊園考

全一册 正稅價金三十五錢

横井時冬君著

●園藝考

全一册 正稅價金四十二錢

本居豐穎先生閱

田所千秋君著 ●小倉の山口

全一册 正稅價金四十八錢

高平貞藤君著

●音訓假字便覽

全一册 正稅價金四十六錢

村上忠順君頭註

●新葉和歌集

全一册 正稅價金六十三錢

國語傳習所藏版

小中村義象先生著

●女子書簡文

全一册 正價金二十錢

服部元彦先生編輯

●日本小辭典

全一册 正價金四十錢

有住齊先生著

●女禮式と婚禮法

全一册 正價金十五錢

小中村義象先生著

●國史學

全一册 正價金二十二錢

服部元彦先生著

●國文學

全一册 正價金二十錢

佐々木雲昭先生著

●漢文學

全一册 正價金八錢

醫學士 近藤常次郎先生著

● 育 兒 訓

上眞行先生著

● 唱 歌 教 授 法

● 皇 后 陛 下 の 御 聖 德

● 本 邦 書 道 大 意

● 作 文 法

● 歌 學

● 醫 學 博 士 森 林 太 郎 先 生 著

● 衛 生 學

● 文 部 省 撰 定 日 本 書 道 會 藏 版

● 祝 祭 日 唱 歌 習 字 帖

● 多 田 親 愛 先 生 編 書 日 本 書 道 會 藏 版

● か な 帖

全一册 正價金十二錢

全一册 正價金十二錢

全一册 正價金八錢

全一册 正價金十五錢

全一册 正價金十錢

全一册 正價金十八錢

第一卷 正價金二十錢

第二卷 正價金廿四錢

落合直文先生講述

關根正直先生講述

大槻文彦先生著

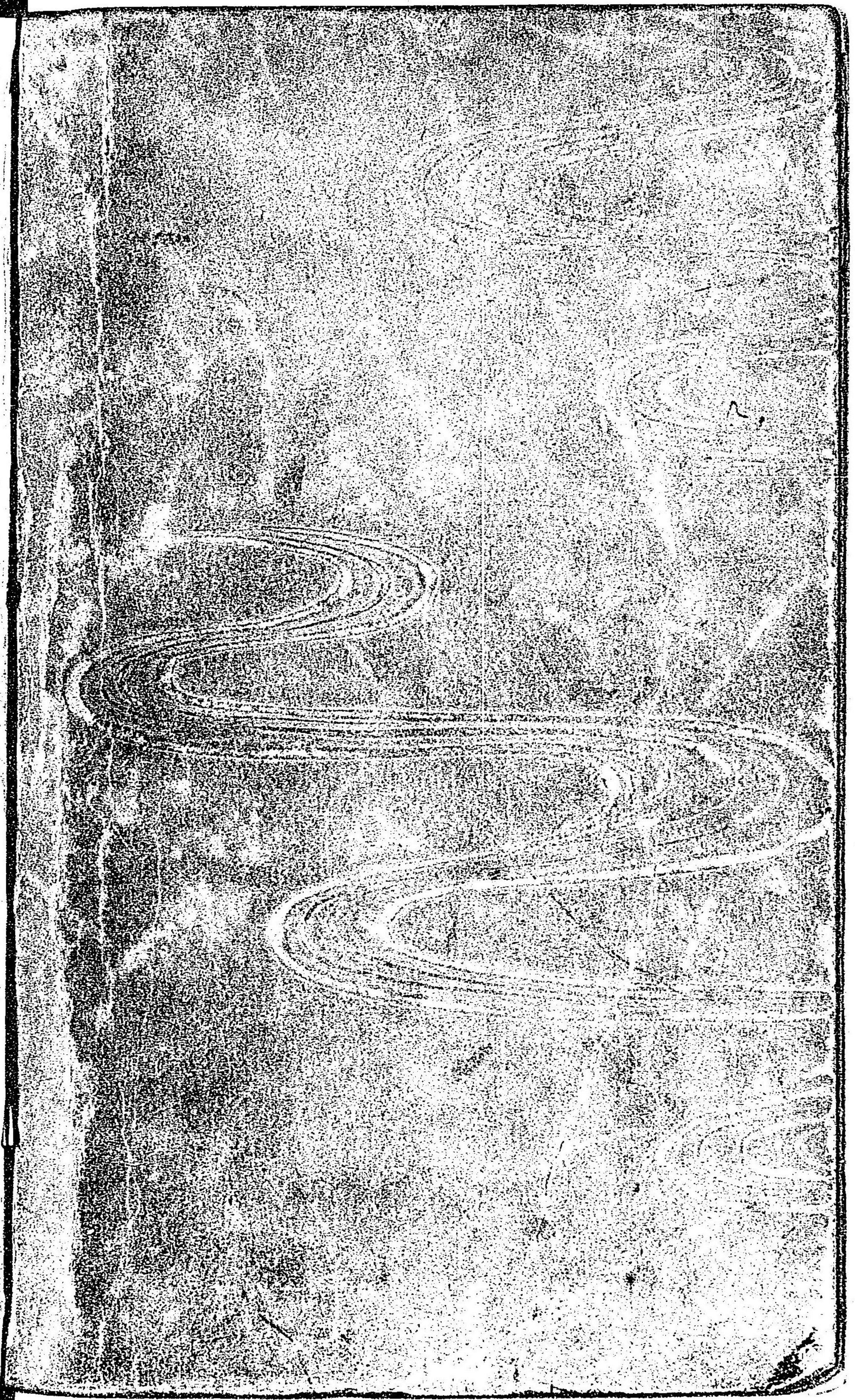
大和田庭樹先生著

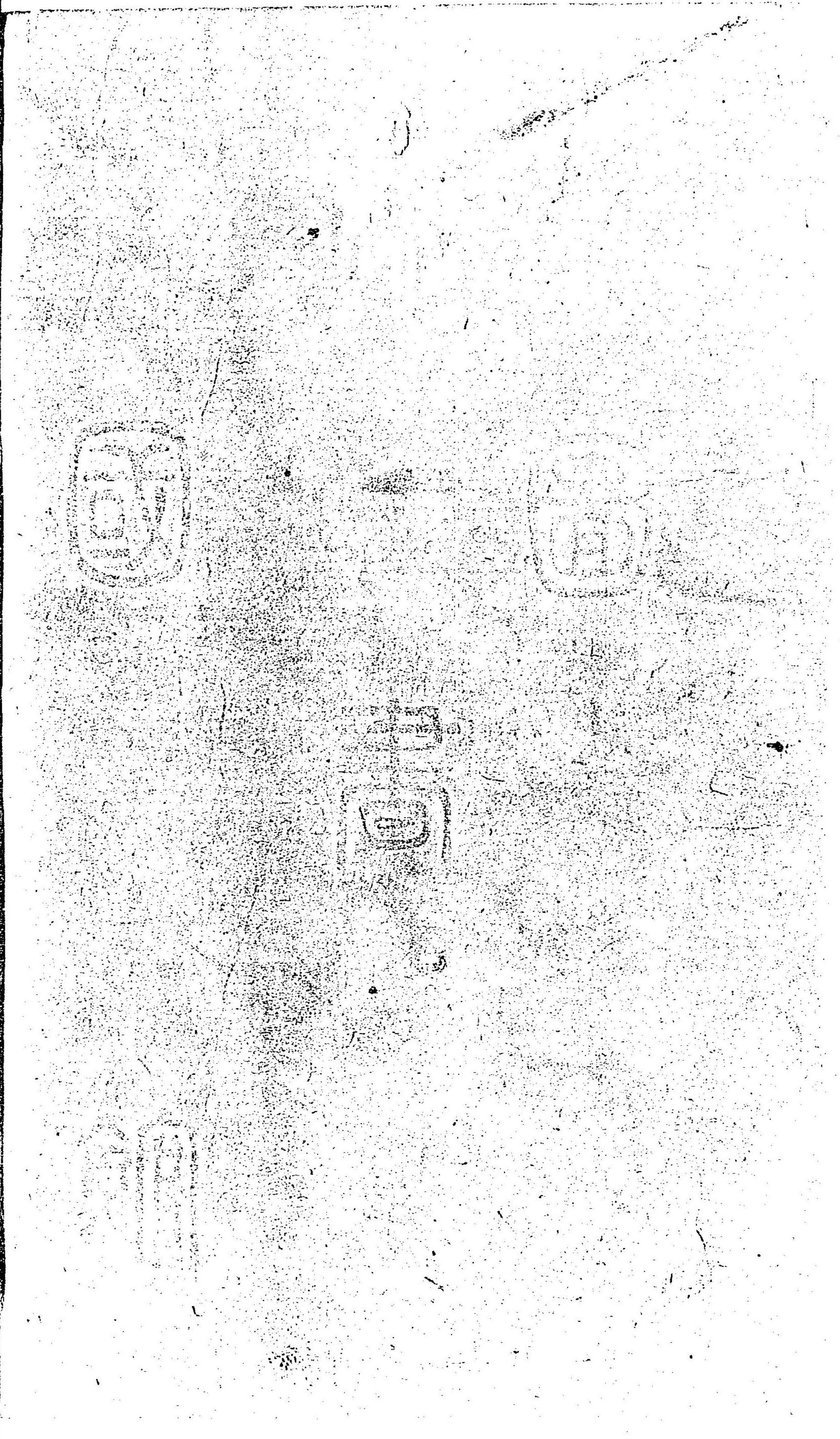
東京市神田區表神保町二番地

六合館 菫卷書店

發 兌 所

4  
277







参考  
吉野拾遺

4

277

310261-000-0

4-277

参考吉野拾遺

小山 多平理 校訂

考卷  
吉野拾遺

全

4  
277

|       |             |   |   |    |
|-------|-------------|---|---|----|
| 館書圖京東 |             |   |   |    |
| 一     | 三<br>七<br>七 |   | 四 |    |
| 冊     | 號           | 架 | 函 | 類門 |

